

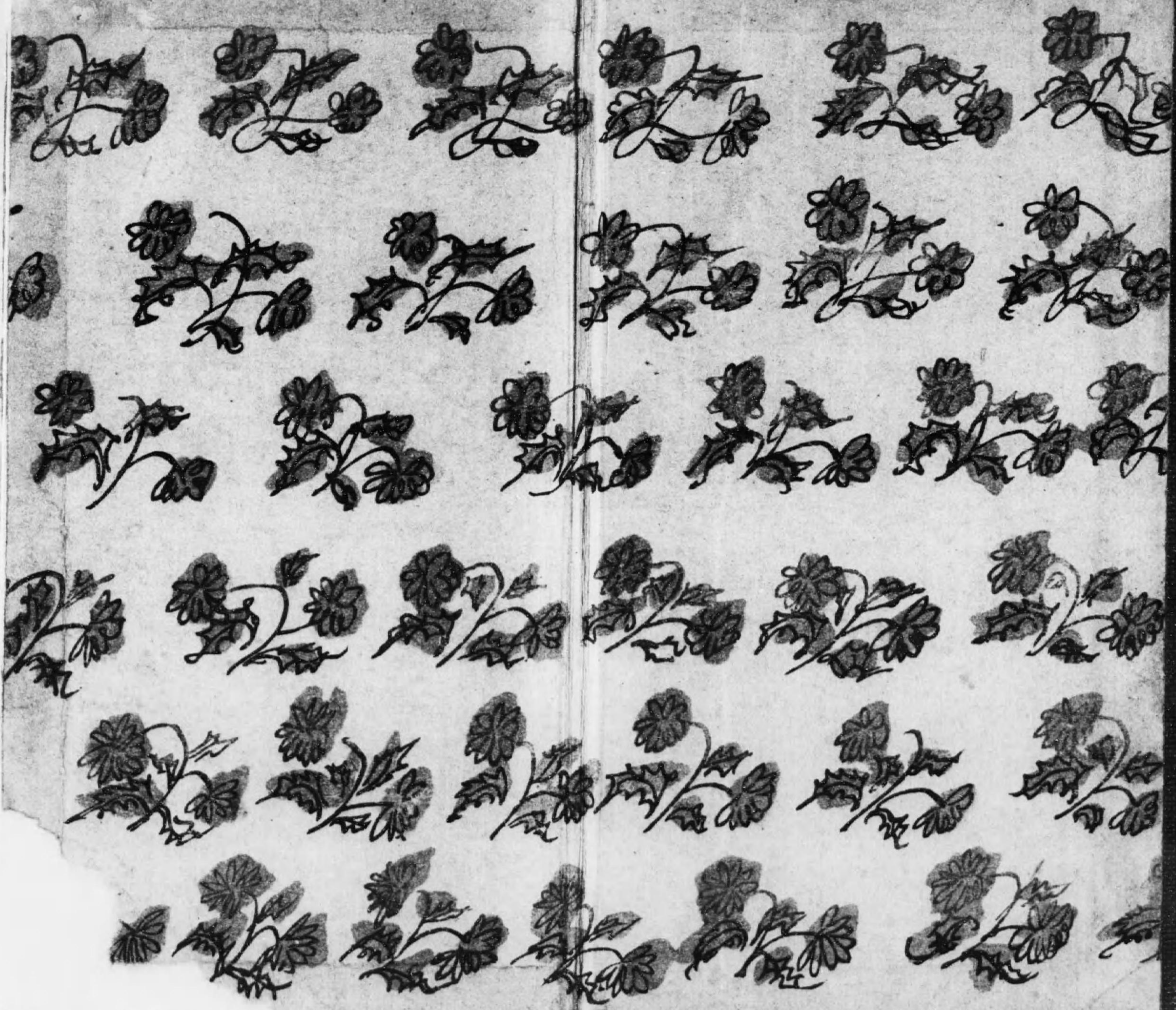
501

71

9 1 2 3 4 5 6 7 8 9 10 <sup>19</sup>/<sub>m</sub> 1 2 3 4 5

始





ト211-18

501-71



生乃二  
作袋花



生誕五十年記念



生  
辰  
五  
十  
年  
記  
念



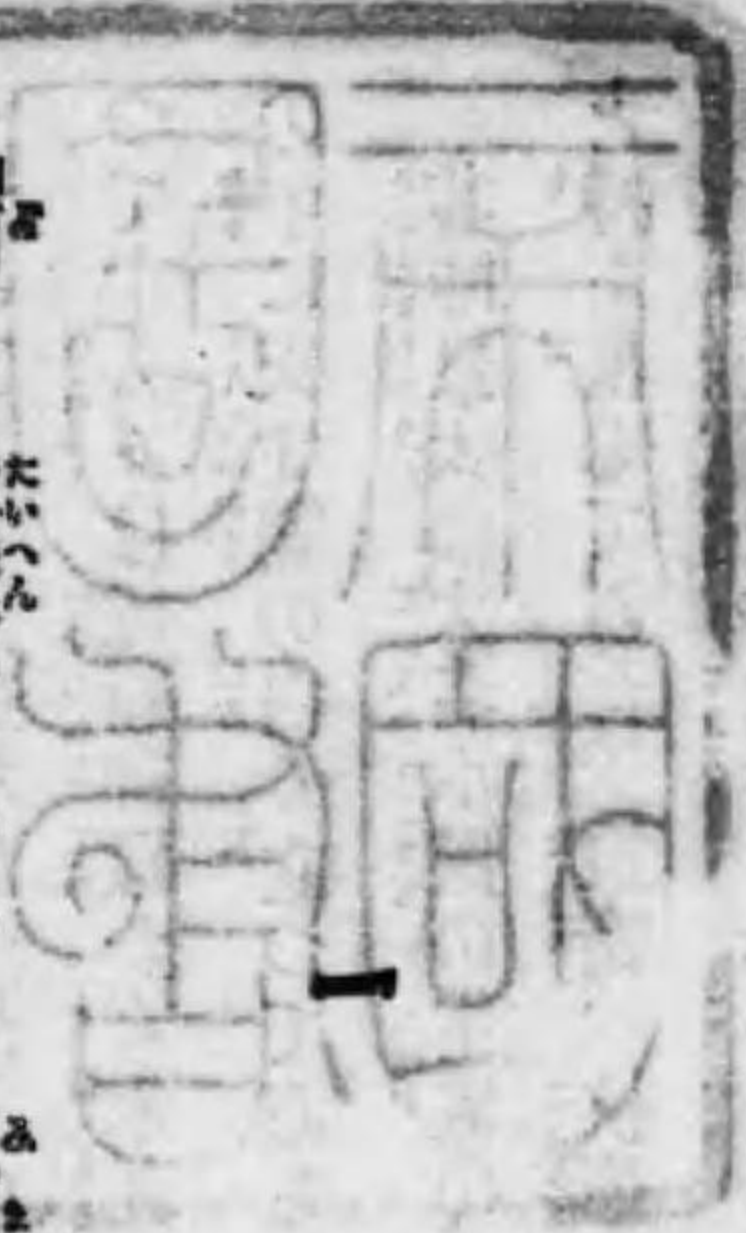
時は過ぎゆく

次 目



時は過ぎ行く  
田舎教師

朝の霞言のく



「何うも大變だ」あたりを見廻すと、良太はかう太息しない譯に行かなかつた。垣根は壞れてゐるし、畠は捨てたまゝになつてゐるし、草藪は容易には入つて行けないほどに深く、繁つてゐる。奥の築山のあるあたりは、それでもいくらか秩序立つてはゐるけれども、何年にも手を入れなしたことのない松やら楓やら高野槇やらが繁りたい放題に繁つて、昔の大きな邸の址は、人工から再び自然に歸らうとする趣を見せてゐた。

「まあ仕方がない、ゆつくりやるだ」良太はかう思つて鋤を捨て、休んだ。あたりには誰もゐな  
時は過ぎ行く

かつた。林を透して来る夕日の影は赤くかれの顔を照した。

良太は田舎から頼まれて急に此處に来るやうになつた事情などを思ひ浮べた。今年の春、西風の寒く吹く日に、歴代の殿様の住んでゐた田舎のお城が焼けた。丁度それは維新の大政がきまつて、藩侯が東京のお邸にお引移になつた翌々年であつた。火は大手に近いある邸から起つて、見る／＼大名小路の士族屋敷を焼き拂つて、勢熾んに三の丸の新御殿へと移つて行つた。人々は何うすることも出来なかつた。自分の邸の防禦にすら手が足りないほどであつた。あれよく／＼と言つて、人々は唯新御殿から本丸の方へ焼けて行くのを見た。黒煙は漲るやうに巻き上つて、猛火の中に天守閣の白く立つてゐるのが見えた。

其時良太は大名小路の自家の難に赴いて、一方家人を指揮すると共に、一方家具を裏の廣場へと持ち出してゐた。箆、挾箱、槍、刀、刀架、勝手道具、その向ふには、疊を立て廻した中に、奥方や老隠居や女中やお子達の避難してゐるのが見えて、折々立つて此方へ出て来る奥方の姿が鮮かに畠の中に浮び出してゐた。あたりは時の間に焼野原と變つて、寒い西風が凄しく災後の餘

塵を吹き立てた。誰の顔にも悲惨な絶望と悲哀とが明らかに見えた。殿様に別れ、世祿に離れ、権力に離れて、更に逢つたこの不慮の火災には、愈々士族の人達をして恐ろしい封建の末路を思はせずには置かなかつた。「もう、殿様の世もこれでお了ひだ」かう思ひながら、猛火の中に焼け落ちる天守閣を人々は唯茫然として見詰めた。

その火は殆ど城と城下とを悉く焼き盡した。朝から始まつて、夜になつても其火は猶消えなかつた。一方屋敷の方へと出て行つた火は、徒士足輕の住んでゐる方までをも焼き拂つた。良太の家も、かれが主家の世話に忙殺されてゐる間に焼けた。かれの妻は、養父養母と、七歳になる男の兒と、二歳になる女の兒とを危くなくところに避難させて、そして家具を戸外に運び出した。良太が行つて見た時には、氣丈な妻は、箆を持ち出す時に怪我したといふ膝や額の血を拭ひもせず、「それでも好い鹽梅に八分は出しました。鍋、釜まで出したから、まあ好い方だ。安心して下さい」かう言つて、矢張疊を立て廻した中から昂奮した蒼い顔を出して笑つて見せた。

良太は生れながらの侍ではなかつた。かれは城を取巻いた沼の向うの村で生れた。その妹は



城下の町の小商賈の妻になつてゐた。しかしかれは祖先傳來の百姓に満足しては居られなかつた。かれは若い頃に、今の主家の仲間に住み込んで、それから足輕になつた。主家は代々藩の家老をつとめるやうな立派な家柄なので、江戸と田舎との間をかれは何遍往來したか知れなかつた。主家の縁戚になつてゐる矢張家老の家柄の、若い勤王家の伴をして京都から河内の方へと旅行した時には、歴代の荒廢した山陵をそれからそれへと檢分して歩いた。何の守様家來といふ堂々とした書附を先から先へと廻して、宿場といふ宿場からは、本馬と輕尻とを仕立てさせた。

それは丁度維新の風雲の次第に色濃くなりつゝある時代であつた。浦賀の黒船、櫻田の變、横濱の開港、つゞいて長州征伐が始まつた。その時、かれは藩の侍分の家に養子に入り込んで、もう一廉の侍になつてゐたが、同藩の人達と共に御領分の河内の陣屋詰を命ぜられて、いざと言へば、大阪から長州の方へと出張するばかりになつてゐた。何といふ騒々しい世の中であつたであらう。京都では暗殺が暗殺につゞき、江戸と京都との間には、早打が織るがごとくに往來した。

従つて藩中も動搖した。藩唯一の學者で、前には山陵檢分のために伴をした勤王家は、佐幕派の方から壓迫されて、一時は閉門を命ぜられて、それから間もなく水戸の方に行き、歸つて來てからは、城外のある村に閉居した。かれの妻と妻の姉とは、其時分、其處に行つて、その勤王家とその奥方との萬端の世話をした。

振返つて考へて見ても、實に目まぐるしい變遷であつた。何が何だかわからないやうなことが多かつた。鳥羽の戦争から將軍家の歸東、彰義隊の亂、つゞいて薩長の官軍が潮のやうに關東に入り込んで來るまで、かれは或は江戸に、或は田舎にゐてそれを見たり聞いたりしてゐたが、何れが本當で何れが嘘だかわからない中に、城は官軍に明け渡すことになつて、總督の軍隊がやがて潮のやうに城の内に入り込んで來た。

筒袖にだんぶくろ、陣太鼓を叩いし調練するさまも異様であつた。「宮さん、宮さん、お馬の前にひらひらするのは何ぢやえな……」さうした歌が城内の到る處へ滿ち渡つた。

かれの總領の男の兒は其時丁度四つ位であつたが、いつもその調練の太鼓の音に眼をさました。

會津、奥羽の役には、かれは磐城口から仙臺の方へと入つて行つた。しかし大した戦争のなか  
つたその方面では、一年と経たない中に歸ることになつて、翌年の春には、かれは妻子の安全な  
顔を見ることが出来た。そしてそれから後には、廢藩置縣、斷髮令、禁刀令などが續いたのであ  
つた。

「刀は侍の魂だ。刀をさ、せないとは餘りだ」

「刀を捨て、町人と同じになれとは情けないお布令だ」

かういふ聲が彼方でも此方でもきこえた。髪を斷つのは一層それよりも辛いらしかつた。そし  
て一方では、かれ等はこれから先の身邊といふことをも考へなければならなかつた。殿様の去つ  
た後の城下は寂として丸で火の消えたやうであつた。

城の焼ける時分には、時勢の潮流に乗つた藩の人達は、皆な多くは新しい東京の方へと出て行  
つてゐた。主家の主人も、勤王家の學者も、皆なそれ／＼要路に向つて出て行つた。ことに、良  
太の世話になつた勤王家は、早くから攘夷を唱へた人だけあつて、當路の人々に知己が多く、逸

早くある官省に職を奉じて、今では立派な位置に身を置くやうになつてゐた。

良太はある時その人から相談を受けた。

「何うだ、やつて呉れないか」

「左様で御座いますな」

かう言つて良太は躊躇した。

と、勤王家は、「田舎に引込んでゐたつて仕方があるまい。ぐづくしてゐれば、何うせ餘なこ  
とはない。終には、公債までも手をつけて了はなければならぬ。それよりもあそこの下邸は、  
古いお下邸で君公もあれをもう少しよく整理して置きたいと仰しやる。それに、當分私に住ん  
では何うだと仰しやる。不便だから今は困るけれど、その中にとお受けをして置いた。誰か一人是  
非眞剣にやつて貰はなくしてはならないのだが、お前達夫婦がやつて呉れると好いがなア」

「猶よく考へまして……」

「これからは、士族はもう駄目だ。ちやんと土臺をきめてか、らなければ立行かない。これまで

は家祿と言ふものがあつて、言はいまア、遊んでも食つて行かれたやうなものだが、これからはさうは行かない。皆な獨りで獨立して行かなければならない。引受けて呉れ、ば、お前達夫婦の一生の世話は、私が見てやるが……。何うだな？」

「猶、考へて見まして……」

「お前も知つてゐる通り、あの邸は廣いが、急に整理する必要もない。段々に、お前が指揮してやつて呉れ、ば好いのだ。さうすれば、おかねも来て呉れるやうになるし、萬事につけて都合が好いから、成るべくなら、さうして欲しい」

その時は確答もせず引下がつたが、今までの關係上、無下に斷わるわけにも良太には行かなかつた。主家の縁戚ではあるし、妻の幼い頃からの主人ではあるし、それに自分の身の上から考へて見ても、將來何をしようといふ確りとした目算があるではなし、良太は數日の間、彼方に行き此方に行きして相談したが、たうとうそれを引受けることになつた。妻の父は、代々御世話になつてゐるお家だ。それは結構だ」かう言つて賛成した。

其時、良太に養父母がなかつたなら、かれは東京行を思ひ留つたかも知れなかつた。良太は侍になりたければかりに、自分で望んで養子には入つただけれども、今になつて見れば、強ひてその家名を相續する必要もなかつた。それに、その養父母と妻との折合も餘り睦しい方ではなかつた。養父母には後になつてから男の兒が産れた。

良太が田舎を立つて來る時、養母は言つた。「お前は、家のあととはつがない氣かえ？ それならそのやうにしなければならぬから……」この言葉の陰には、公債の處分がかくれてゐた。養父母はそれなら當然公債は此方で貰はなければならぬといふ腹であつた。しかし良太はそれには確答を與へないで出京した。

それから半年ほどして、妻のおかねは二人の兒を伴れてやつて來た。

良太は半ば破壊された下邸の一部を整理して住んだ。それは元の邸の残部で、流石昔は殿様が折々お出になつただけに、木口なども精選され、庭と客間の具合なども注意してつくられてあつたが、何しろ百年以上も経過した家なので、垂木も古く、庇もところ／＼破れて、入つて見ると壁は到る處落ちてゐた。で、主人の入るまでは、其方は其方ですつとして置くことにして、かれは先づ勝手に近い、昔女中の住んだらしい六疊の二階と八疊の下階とを掃除した。

勝手のはしには、古い内井戸があつて、腐つた縄や古い桶がそれに吊されてあつた。かれは先づそれを新しくして、つゞいて流しの板を張り替へさせた。昔から十年も番人として住でゐた伺僕の男は、もう七十近い年であつたが、その男は、フム／＼などと訥つたやうな口の利き方をして、臺所の向うにある三疊の一間に犬か猫のやうな汚ない生活をしてゐた。そこにさし込む午後の日影は、何時も破れた蒲團と襦袢と黒い壁とそこにちぎこまつて日向ぼつこりをしてゐる伺僕の蒼い喪心したやうか顔とを照した。

「捨さん、もつと綺麗にしたら好からうにな」

かう見かねて良太が言ふと、

「なアに、これで澤山だ。お天道様が何よりも暖かい」

こんなことを言ふかと思ふと、フム／＼などと言ひながら、何か買ひに通りの方へと出て行つた。甘薯などを買つて来て、ひとりですれをむしやく／＼食つた。

何うかすると、その伺僕は、良太に、殿様がお出になつた時分のことを口をもが／＼させながら途切れ途切れに話した。「世が變つた、世が變つた。……もう、昔のやうなことは見られねえ。

……お殿様も奥方も若くつて美しかった。……あのお殿様が狂氣にならつしやるとは……。世が變つたんで、えらう御心配なすたと見えるな……。奥方は？ またそれでも生きていらつしやるか……。昔は何も彼も立派ぢやつた……。」かう言つて眩しさうにまばたきをした。

良太がやつて来てても、別に邪魔にするでもなく、さうかと言つて力にするでもなく、唯それだけが自分の用事と言はぬばかりに臺所の内と入口の前のとこを毎日掃いた。そして水などを汲んで手傳つた。

良太は先づ家の周囲から整理してかゝらなければならなかつた。一番先に、垣を直して、それから路を直した。良太の岩乗な姿は、荒れた邸の址のところへくに見えた。時には竹藪の中に見えたり、夕日の當つた垣根のところに見えたり、風の吹き荒ぶ林に添つた路のところに見えたりした。そのあたりにはいつも新しい繩だの竹だの、勘だのが散ばつてゐた。

邸の前の街道は、江戸の四街道の一つで、交通上最も往來の頻繁な道路であつたが、都會の外れの宿場からもうかれは一里近くも隔つてゐるので、人家なども疎らに、畠や林や草藪がその間に縫ふやうにして雜つてゐた。其處等に住んでゐる百姓達は、何百年も祖先傳來ついで土着してゐるやうな人達ばかりで、都會の市場に持出す野菜だの甘薯だの、陸稻だのを作つて、それでその日／＼の生計を立てゝゐた。良太は來ると間もなく、その人達と懇意になつた。侍ではあるが、根が農家に生れたかれは、百姓達に對しても、決して自からを高くするやうな態度を示さなかつた。後には彼方此方に風呂を貰ひに行くほど親しくなつて、夜は遅くまで爐側で話した。良太の妻のおかねがやつて來た時には、餘ほど周圍が片附いてゐたが、それでもまだおかねの

眼を驚かした。「えらいところだ。私はこんなぢやないと思つた」かう言つて、おかねは奥の戸なごを明けて見た。

總領の男の兒は、今まで見たこともない佝僂の其處等を歩いてゐるのを見て、氣味をわるがつて、ぢつと見てゐたが、やがて母親の方へ駈寄つて、指してそして泣いた。

其時、良太は三十八、おかねは三十二であつた。二人に取つては、さびしい生活ではあつたけれど、養父母の許に虐けられて暮してゐるよりは、何んなに好いか知れないと二人は思つた。おかねは故郷の父母や兄や嫂などにわかれて來た話をした。中年で盲した母親が、東京に行つてはまた何時逢はれるか知れない。達者でゐなよ」と言つて見えぬ眼から涙を流した話や、川舟の出るところまで父親と兄とが送つて來て呉れたことなどを繰返して、おかねは眼に涙を浮べた。「兄さんもつとめに出るやうになつたけれど、とても田舎に引込んでゐては仕方がない。巡邏なり何なりに志願して、その中、東京に出るやうにしようと云つてゐました。丸で木から落ちた猿も同じだから、何處の家だつて困つてゐない家はありやしない。僅かなお金では、百姓にだつて急にな

「れはしませんものね」かう言つて田舎の士族達の話をした。

男の兒は初めは遊び相手のないのを淋しがつてゐたが、それにもいつか馴れて、良太の仕事をしてゐる傍で、何か獨言を言ひながら、終日長く遊んでゐた。おかねは女の兒を負つて、物を買ひに通りの方へ出て行つたか、綿の厚く入つた黄縞のねんねこが馬だの車だの通る街道に浮くやうに際立つて見えた。おかねは言つた。「東京ツて言つても、名ばかりね。小切を買ひに行くんだつて一里も行かなけりやないんだもの、田舎の町の方が餘程近い」

勤王家で學者の旦那の家は九段の方にあつたが、暇な時には、をり／＼此方を見にやつて来た。良太の働いてゐる傍に来て、

「おう、大分綺麗になつた」

こんなことを言つて、ぶら／＼しながら、東京の方であつた話だの、役所の話だの、君公の話だのをした。良太が来て呉れたので殿様が安心したと仰しやつたといふ話をしてきかせた時には、良太は冥加に餘つて勿體ないやうな氣がした。昔ならば、一生經つても、殿様からお言葉を頂戴

Stand up

することなどは望んでも得られないことなのに、いかに四民平等の世になつたからと言ひながら、ぢかに良太と仰しやつた言葉を聞くのは、良太には此上もない名譽に感じられた。良太は駿河臺にある舊藩侯の宏壯な邸に二度ほど行つてゐた。

「私に引越せと殿様は仰しやつて下さるが、まだ二三年は駄目だな」

かう言つて、來ても旦那はぢき歸つて行つた。かと思ふと、おかねが縁側で汚れた小切などを散かして裁縫をしてゐる傍に、ひよつくり、庭の扉を明けて入つて來て聲をかけて驚かしたりした。旦那は良太とは三つ年上であつた。それに稚い時からおかねは邸に上つてゐたので、「おかねおかね」と言つて旦那はいつも親しい言葉をかけた。今でもおかねの姉のおつるは九段の邸に奉公してゐた。

竹藪を隔て、向うに小さな尼寺があつた。その本堂の灯は、日が暮れると、大海の中の灯のやうに、闇の中に、ほつつりと一つさびしく輝いて見えた。朝は朝から讀經の聲がきこえた。

さびしい寒い初めての冬が來た。野を通つて來る風は、凄じく周圍の樺や檜に鳴つた。朝ごと

時は過ぎ行く

の霜は底を白くした。

「國よりも寒い位だ」

おかねはかう言つて、古い炬燵に火を入れた。東京の方に、何處か遠くで火事があると見えて、半鐘が一つ鳴つてそして止んで了ふやうな夜もあつた。

三

ある朝おかねは何氣なく三疊の戸を明けて見た。

「貴方、貴方！」

急に聲を立てた。

丁度其時厨に入つてゐた良太は、けた、ましいい聲を聞きつけて、何事かと思つて急いで其方へと走つて行つた。

「何だ、何だ」

驚いたやうな、氣味のわるいやうな顔をして立つてゐたおかねは、「大變、大變、捨さんが死んでゐる！」

「え！」

「捨さんが死んでますよ」

良太は急いで三疊へと入つて行つた。見ると、その尙僕は、汚ない破れた蒲團の上に身を半分乗り出して、何の苦痛もなかつたやうに、さながら眠つてゐるのではないかと思はれるやうに顔を半分上に向けて死んで冷めたくなつてゐた。二三日前から、何だか體の具合がわるいとは言つてゐるが、昨日も夕方に一人でそこらぶら〜してゐた。薬でも上げませうかとおかねが言ふと「あらば貰ふかな」と言つて、風邪ぐすりを一服貰つて飲んで寝た。しかし死ぬやうな病氣とは二人とも夢にも思つてゐなかつた。

「やれ、やれ」

時は過ぎ行く

かう言つて良太は顔を持ち上げて見て、それから夜着を上にかけてやりながら、「いくつだらうな、七十二三だとは思ふが、年をきいても話さない人だつたから……。やれ、やれ、そんなにわるいんなら、もつと見てやればよかつた」

「本當にびつくらした」

おかねは上つて来て、また覗くやうにして、「私、始めは寝てるかと思つた。でも、體を半分乗り出してゐて、何だか變だから、上つて、手にさはつて見ると、つめたいから、びつくらした！」

「やれ、やれ」

良太は再びかう言つたが、それにしても、知らせてやるところがない。何でも姪が府中とかにゐるが、それも、此間、死んだつて言つて、がっかりしてゐるから、何處にも言つてやるところがない。しかし九段とお邸にはしらせなければならぬ

で、良太が知らせて行つて歸つて来る間に、近所の百姓の老人達——四十年前から知つてゐる人達が二三人それと聞いて集つて来て、線香を立てたり、團子を拵へて来て上げたりした。あ

る老人は死んだ人が始めてこの下邸に奉公に来た時分を思出すやうにして、長い年月の間に種々のことがあつたことを話した。若い時は、それでも元氣な男だつた。二十年ほど前に、向うの村に、水呑百姓の後家があつて、それと出来て、随分長い間通つてゐたもんだが、かうある人が言ふと、「さうさ、よくあそこに行つてゐたもんだ」など、その時分を知つてゐる人達が相槌を打つた。邸の佝僂と言へば、近所では誰も知らないものはなかつた。

九段でもお邸でも、厚く葬つてやれと言つて、然るべき御思召の香奠が下つた。それで、良太は坊主を呼んだり、棺を拵へたり、通夜の酒を買つたりした。皆な立合つた上で、持つてゐたものを調べて見たが、金が二分と少しに、汚ない著物が二三枚あつたばかりで、他にはこれらしいものもなかつた。昨日買つて食つたらしい大福の残りが二つほどごろ／＼と轉り出した時には、人々は可笑がつて笑つた。「よく物を食ふ人でしたよ。始終口をもぐ／＼させてゐましたよ。酒を飲まないから甘いものを食ふのが何より樂みだつたんですね」とおかねは言つた。

あくる日の午後、導師を先に立てた棺は、五六人の人達に送られて、淋しい裏道を寺へと向



時は過ぎ行く

三〇

つた。街道よりも裏道をこつそり葬つて了ふ方が好いといふ老人達の意見に従つたのであつた。その日は、寒い風が路傍の落葉をかさ／＼と吹き起した。地平線を遠く劃つた山の頂には、雪が白く光つて、林の上には富士が眞白になつて聳えてゐた。

街道の奥にある寺では、讀經する僧の傍に、蠟燭がチラ／＼と瞬いた。やがて棺はこそから裏の林に添つた墓地へと運ばれて行つた。墓は丁度八年前に下邸で切腹を仰せ付けられた三人の勤王黨の埋葬せられた側のところにあつた。

老人達は話した。

「あの切腹の時は騒ぎだつたな」

「この死んだ人が慌て、飛び出して來たつげがなア」

「早いもんだ。年月の経つのは——」

ある老人は慨嘆するやうに、「あの時、切腹した人達だつて、今になりや死ななくつたつてよかつたんだ。今になりや、却つて手柄があつたつて重く用ゐられてゐたかも知れねえ。運がねえんだな。中に、一人坊主がゐるたつげが、死ぬ時口惜しがつて騒いだつて言ふことだつた。若い立派な侍もゐるたな」

「運がねえんだな」

こんな話をしてゐる間に、棺は下に下されて、穴掘の男は無造作に土をかけた。やがて人々は散じた。

四

旦那が九段の邸から、此方へ移轉して來たのは、その翌々年の初夏の頃であつた。その時分は周圍はかなりによく整理されて、前の草藪は梅のわか木の林になり、それにつゞいて畠などが綺麗に出來てゐた。その年の初め頃から、今年は愈其方に移轉するからといふ話があつて、植木屋だの大工だのが大勢入つて、鉦の音や木鋏の音が四邊の縁の中に響きわたつて聞えてゐたが、

時は過ぎ行く

三

愈々移轉といふ月の初めには、家屋の部分々々の修繕も残りなく出来上つて、久しく閉された家は、再び春に逢つたやうに、美しい初夏の光線に彩られた。新しい疊、新しい襖、床の間の樺の一枚床は鏡のやうに拭き清められて、勝手元と居間との間の扉には新しい檜の匂がした。

をりく、様子を見にやつて来た旦那は、「かうして見れば、そんなに住み心地もわるくないな」こんなことを言つて、大工や植木屋のせつせと仕事をしてゐる傍に立つて見てゐたりした。

移轉の日には、車が何臺も何臺も街道から門の中へと入つて行つた。古い本箱などを積んだ車は、玄關から下されて、そこから手傳の人足達がそれを奥に運んだ。勝手元の方には、おかねの姉のおつるが先に立つて女中を指揮して、勝手道具や箆笥や行李などを其處此處に並べた。午には遠い町の蕎麥屋から、男が山のやうに重つた蒸籠を臺所口に運んで行つた。おかねは女の兒を負つてせつせと奥の整理を手傳つた。

午過になつてから、奥方の一行の車は着いた。

奥方は三十四五で、綺麗に髪を丸髷に結つて、その頃流行つた小紋の袷に、黒縹子と縮緬との

腹合せの帯をしめて、笄をさしてゐた。色はぬけるほど白く、脊は中脊で、姿はすらりとしてゐた。江戸家老の家柄に生れて、姫様として育つた品格は、何處となくその態度に備はつて、立居振舞にも大家の奥方らしいところが十分にあつた。それに、この奥方には子供がなかつた。従つて年に比べては、非常に若く美しく見えた。

旦那が佐幕黨の家老達から壓迫されて閉門を仰付かつたり城外の村に住んだりした時分には、この奥方も随分種々な艱難に遭遇した。時には米櫃に米がなくなつて、侍女のおつるが一升買をしたことなどもあつた。それに、旦那は家に居ないやうな時が多かつた。旦那は結婚した當座から、京都の方へ行つたり、水戸へ行つたりして、家を外に、天下の志士と交際した。今でこそ、新しい政府に重く用ゐられて、立派な邸宅に住むことが出来るやうになつたが、時勢が非であつたなら、更に何んな艱難に遇つたか知れなかつたのであつた。

奥方と一緒に、旦那の實の姉に當る三十八九の刀自が、小形の丸髷に餘り派手でない扮装をして、後から續いた。この姉は名をお高と呼ばれて、七八年前に家中のさるところに嫁いで、男の

見を一人持ったが、不縁で出戻つて来て、弟の許に厄介になつて居た。しかし物の辨つた弟は、決して邪魔にするやうな素振も見せず、自分始め、お姉様々々と言つて、下々の者までそれを眞似させた。食事の時などにも、お姉様が座に就かない中は、決して自分も箸を取らなかつた。姉はまた姉で、繁行、繁行と言つて、何事に由らず總て弟に相談した。奥方との間も至極圓滿であつた。「良太、お苦勞だつたな」

かう言つて、姉刀自はそこに働いてゐる良太に聲をかけた。

「まだ、本當に片附きませんで……」

揉手をしながら良太が言ふと、

「はア、これはもと御邸の奥の間の方だねえ。餘程前に、一度お上のお伴をして来た時があつたが、その時分は、もつと大きなお邸だつたが」縁側に出て見て、「それでもお庭は變らない」

「随分ひどくなつてをりましたんですけれども、まア何うやら斯うら、この位まで致しました。今日までもう少し植木に手を入れさせようと致しましたんですけれども……間に合ひませんで」

「段々でなければ、さう綺麗にはならないよ」かう言つて、姉刀自は自分の居間と定められた二階の方に行つて見た。そこは奥方の居間の入口から階段を上つて行くやうなところで、南の丸窓からは、庭の新緑が滴るゝやうに美しく見えた。涼しい風は、兩方明いた障子から流るゝやうに入つて来た。

「此處は夏は涼しくつて、冬は暖かだらうと思ひました……」

「結構だねえ、勿體ない位だよ。繁行の書齋にでもする方が好くはないか」

「旦那様のは、奥に御座いますし、それに、さう仰しやられましたから」

「さうかえ」

肥つて何も苦勞もなさゝうな姉刀自は、縁側へ出て、暫し庭の方を見てゐたが、やがて下に下りて、「お君さん、好いところだねえ」と奥方に聲をかけた。

奥方と刀自とは、彼方此方と家の中を見て歩いた。旦那の書齋、客間、疊を敷いた長い廊下、剛も綺麗に掃除されて、石の手洗鉢には綺麗な水が一杯に満ちて、それに、新緑と空と白い雲と

が静かに映つた。小鳥の聲が賑やかにきこえた。

「鳥がどう御座いますね」

「町中とは、何うしても違ふね」

「九段にをりますと、鳥の聲など、滅多にきこえない位ですもの」

「さうですね」

二人はかう話しながら歩いた。

飯焚きに、小間使に、僕に、それに、おかね姉妹に、親類の人達などが来て、その日は湧き返るやうな賑やかさであつた。今まで長い間、戸閉になつて、暗くさびしく林や草藪の中に埋れてゐた家とは何うしても思はれない。おかねの總領の男の兒は、近所の學校に通つてゐるが、歸つて来ると、俄かに人が大勢入り込んで来てるので、喫驚したやうな顔をして、凝とそのさまを見詰めてゐた。

暫くすると、門から長い涼しい木蔭の路に車の轆る音がして、旦那は役者からぢかに此方へと

歸つて来た。あ、もう皆な来たか。それは好かつた。早かつたな。何うだ。少し陰氣だが、まあ暫らく此處に我慢してゐるんだな。莞爾しながらかう言つて、奥方や姉刀自のゐる茶の間の長火鉢の前に来て、どつかと坐つた。

五

五十格好の常さんといふ奴僕は、毎日午後二時頃になると、内井戸の釣瓶を繰つて、据風呂の水を汲んで、その下の火を燃きつけた。

それは丁度奥の茶の間から廊下を通つて来るやうなところにあつた。火を燃すところは、晝でもちよつと薄暗く、外から入つて来ると、人のゐるかゝるないかもわからない位であるが、下を燃きつけると、火がちよろ／＼と薄暗い壁に映つて、脊を丸くして、木片や木の根ツ子を釜の中に投り込んでゐる常さんの姿がぼんやり浮んで見えた。常さんはいやに鼻にかけて口をきくやうな

老爺で、ふが／＼爺といふ名が下では通つてゐた。本當に、あのふが／＼が、遊んでばかりゐてしようがない、などと女中達はいつも噂してゐた。

風呂が沸くと、常さんはいつも臺所へ行つて、

「お湯が沸きましたから、お上に申上げて下さい」と吃りながら言つた。

しかし決して奥方が一番先に入ることはなかつた。お姉様が入つて、旦那がゐれば旦那が入つて、それから奥方が入つた。奥方は風呂場の戸を明けた處にある三疊ばかりの一間に着物をぬいで、湯から上つてからも、長い間かゝつて、其處でお化粧をするのが常であつた。湯あがりの奥方の顔は灯のまだつかない夕闇の空氣の中にくつきりと白く見えた。

前から抱へてゐた車夫の定は、旦那が引越すと共に、一緒に引越して来て、門前からさして遠くない小さな百姓家の片隅を親子三人して借りて住んでゐたが、朝、七時になると、きつまで、俵を立關の方へ持つて行つて置いて、臺所の前の日當りの處に立つてゐたり、良太が住んでゐる

縁側のところに来て腰をかけてゐたりして待つた。さういふ時には、おかねはきまつて火鉢を出したり茶を出したりした。二番目の女の兒はもう四歳になつて、ちよこ／＼と其處に歩いて来ては無邪氣な口をきいた。

「遠くつて大變だね」

「なアに、それほどでもありません」

「お役所に行つて、待つてゐる間が大變でせうね」

何うかしておかねがこんなことを訊くと、

「何アに、溜りがありましたな。いろんなことをしますよ。私からは駄目だが、博奕を打つ奴も随分ありますよ。此間、副島さんの車夫と藤浪さんの車夫とが喧嘩して、頭から血を出したりなんかして大騒ぎでしたよ。亂暴者が多う御座んすからな。」さういふ定は、おとなしい、無口な、人の好い車夫であつた。

やがて、「定さん、旦那さまがお出まし！」

かういふ聲がきこえると、やがて車の音が門前の磔を轆つて向うへと出て行つた。

毎日四時頃には、旦那はきまつて歸つて来るが、時には九段の邸の方へ廻つて泊つて来ることもなともあつた。其處には、二十七八の綺麗な妾がゐて、おかねの姉のおつるは、取締をするために、移轉してから間もなく再び其方へと行つて勤めてゐた。

「昨夜は向うへお泊りなもんだから、今日は奥様の御機嫌がわるくつて仕方がない」おかねはをり／＼こんなことを良太に言つてきかせた。

「子供がないから、何うしても、普通ではありませんよ」

「一人位あると好いんだが」

「本當ですよ。あればまぎれてゐるんだけど、ないもんだから、氣難かしくつてしようがない。

今日もさんざ怒られた」

「仕方がない」

「それアね、奥様の身になれば、尤もですけども、こんな立派なお家なんだから、お妾の一人や

二人位平氣で入らつしやると好いんだけども……」かう言つたが、それに、奥様は姉さんが向うに行つてゐるのですつかり向う側になつて了つたと思つてゐらつしやるんだから、本當に困る」

「そんな馬鹿なことがあるもんか」

「だつて、さうなんだもの」  
しかし旦那とお高刀自の前では、奥方は夢にもそんな風を見せなかつた。奥方は綺麗にお扮装をして、しやんとした姿で、旦那の晩酌の濟むのを待つて、女中なりおかねなりに給仕をさせて夕飯の箸を取つた。旦那は旦那で、機嫌の好い顔をして、役所であつたことや、世の中の移り變りや、租税の話や、銀行の話などを種々と話した。兵營の騒動の話なども、家の人達は新聞よりも却つて旦那の口から詳しく聞いた。参議達の噂なども旦那はよくした。

「これからは、俺は士族だからでは通らない。何でも自分の力でなければ駄目だ。町人でも實力さへあれば、何んなにでも、立身出世が出来る世の中になつたんだから……。何でも勉強が肝心だ。それにしても、考へると、よくもかうも變つたものだ。十年前には、今、こんなにならうと

は夢にも知らなかつた。参議達でも、あんまり變りすぎたのに喫驚してゐる位だからなア。時にはまた、「それにしても、士族は惨めなもんさ。公債を貰つたつて、奉還したつて、僅かの金では何にもなりやしない。それに、士族をやめたから、小く町人になるつていふ譯にも行かないし、昔の癖が除れないから困るよ。國などでも、もう随分困つてゐるものもあるやうな話だ。」さういふ時には、奥方の里の話や、縁戚に當る國家老の家の話などがきまつて出た。奥方の里では、維新の始めに父親が死んでから、兄弟はいづれもやくざで、長男は家出、次男は放蕩、三男が國を仕舞つて東京に出て、何處か下町で商賣を始めたが、これも思はしくなくて、をりく奥方の許に愚痴を滴しに來た。國家老の跡目を相続した中年の男の許には、此家の旦那のおきよ様といふ妹が嫁いてゐるが、何の彼のことと思はしくなく、火災に焼けた後は、町に家作を買つて、人を使つて石屋などを始めてゐる。林は駄目だ。のらくら者だからな。あんなものに妹をやつたのが過誤だ。昔なら、馬鹿でも何でも家老様で通つて行つたが、世の中がかうなつちや何うにもならない。あれこそ本當に木から落ちた猿だ。かう言つて旦那は笑つた。其他、松

江の藩士に嫁いた奥方の妹が、一家職を求めて上京して、近い處に住んでゐるので、ちよいちよよく訪ねて來た。その妹には、七歳の總領の男の子に四歳の次男があつた。良太は昔から知つてゐて、おみか様、おみか様と呼んでゐた。それに、その夫もをりくは訪ねて來た。武藝の達人で、槍は藩中でも聞えた方だが、それより他には學問も世才もないやうな人で、旦那とは話が合はなかつた。あゝいふ人間が多いから困るんだ。時勢を丸で知らないで、また再び殿様の世になるやうなことを考へてゐるんだからな。など、旦那は言つた。

六

旦那は學者でゐながら、一方稼穡の道にも長けてゐた。廣い邸の中を日曜などにはぶらぶら歩きながら、土地に對する種々な計畫を立てた、梅の若木を安く買つて栽ゑさせたのも、竹箴を段々大きくさせたのも、皆な旦那の意見であつた。ある日には、奥の林の縁で働いてゐる良太を捉

へて、良太、良太、好いことがある。茶を栽えろ、茶を栽えろ。茶ならきつと旨く出来る。十年後には立派なものになる。狭山茶つてな。この奥に行くと、茶が澤山出来る。かう言つて、茶樹の苗を澤山に安く買つて、それを梅の樹の下に一杯に栽えさせた。

良太は常にせつせと働いた。國の方の士族の零落の話などを聞くと、再び世に出ようとすうな念はもう毛頭起らなかつた。此處にゐて、精々と働いて行くより他、適當な職業は自分にはないやうに思はれた。良太は旦那の家の内のことも外のことも、いつも相談相手になつたが、しかし多くは草鞋を着けて戸外に出て働いてゐた。それに、近所にゐる百姓達との交渉もすべてかれがその任に當るので、その人達との交際も段々篤く深くなつて行つた。何處に行つても良太の評判はよかつた。「あんな正直な人はあんめい」かう誰も彼も言つた。お邸の青山さんと言へば、近所で知らないものはなかつた。植木屋、土方、左官、指物師、さういふ人達は渾べてかれを青山の旦那、旦那と言つて尊敬した。

植木屋の親方は、其頃矢張かれと同じ年恰好であつたが、新開地の横濱の方に好い仕事があつ

て、想像にも及ばぬほど金廻りがよかつた。旦那、それは大したもんですぜ。素手で行つても、少し、頭のあるものなら、ぢき、でかい金持になれる。金がころがつてゐるつて言ふのは、横濱のこつた。私なんか、高が植木屋だから大したことも出来ねえが、それでも傳馬の一杯も品川から出すと、歸りには胸がけにチャラチャラする程金になるんだからね」などと言つてきかせた。しかし、良太は、さういふことに對しては、更に心を動かさなかつた。酒も飲まず女にも興味を持たない良太は、近頃出来た場末のあやしけな小料理屋の前をも知らぬ顔をして通つて行つた。國の方からの便りと、新しい東京の勃興して行く光景とは、かれの眼の前にいつもごたくと混り合つて見えてゐた。一方では士族が零落して行くと共に、一方では新しき氣運が凄じい勢で巴渦を巻いて進んで行つてゐた。をり／＼用事があつて東京の方に行つて見ると、車が通り、馬車を通り、汽車が駛つてゐた。人々の風俗なども著しく變遷した。もう昔のやうな大小を差したお侍を見ることも出来ず、自身番なども見ることも出来ず、十年前なら誰か必ず斬つて捨て、了つたであらうと思はれる外國人が、意氣揚々として馬車に乗つて街頭を走らせて行つてゐる



た。

寫真だの新聞だのもの、かれにはめづらしく思はれた。

おかねの里の兄からは、「田舎にゐるたつて仕方がない。何うか方法を立てなければならぬ。老父はもう年を取つたから仕方がないが、私はかうしてじつとしては居られない。それに子供も大勢ゐるから、そのことも考へなければならぬ」かう度々言つてよこしたが、遂に決心して、警視廳の巡查を志願して東京に出て来たのは、良太が其處に来てから三年目の年の暮に近い頃であつた。其時分、警視廳には、同藩の者が澤山に集つてゐた。中にはかなり好いところまで立身してゐるものなどもあつた。義兄はさしづめ下谷の坂本署詰を命ぜられて、取敢へず其方に下宿したといふ報知があつたが、最初の日曜日には、朝早くから義兄が良太を訪ねて来た。

國の話やら、士族の零落した話やら、新しい勤口の話やらが盡きずに語り出されたが、それに引かへて、おかねは兄の口から父親や母親や姪甥達の消息などをきいた。兄の總領の娘の話なども出た。「おてつはもうとつて十七になるかね。田舎に置いたつて、しよやうがないぢやないか。それよりも東京にお出しよ。お邸にも、今、丁度手がないんだから。奥様にお願ひしたら、使つて下さるかも知れないよ。田舎に置いたつて仕ようがないぢやないか」などとおかねは言つた。おかねは、國を立てて来る時大手のところまで、嫂に伴れられて送つて来て呉れた色の白

いほつそりした姪の成長くなつたさまを眼の前に浮べてゐた。兄はかねて主従に近い關係があるので、奥へも手土産を持つて顔を出したりしたが、その日は奥で御馳走になつて、元氣の好い顔をして夕方に歸つて行つた。總領の娘の話は奥方の口からも出た。

その次の日曜日には、今度は、そのかへしに良太が義兄を訪ねて行つた。それは丁度根岸の奥に當るやうなところで、旗本の隠遁した大きな二階は、その大勢の巡查の合宿所になつてゐた。そこには各藩の人々がゐた。佐土原藩の人もゐれば、會津藩の人もゐた。義兄は、そこでは話が出來ないと言つて、下の一間に良太を迎へたが、其時、總領の娘を上京させるといふ話が始めてきまつた。酒を飲まない良太は、近所の名高い汁粉などを取つて貰つて、歸りは上野の森をぬ

けて来た。

おてつはその翌年の春になつて始めて上京した。丁度東京に来るといふ近所の確かな人があつたので、それに伴れられて、田舎の川の端にある船宿の棧橋から舟に乗つて、大きな流を下つて、その翌日の午後に父親の下宿してゐるところに着いた。父親は一晚とめて、翌日すぐ良太の許へとおてつをよこした。

俄かにませて大きくなつた姪を叔母は見た。田舎仕立てではあるけれども、色は白く、髪は濃く、姿はすらりとして何處となく品があつた。落着いて物を言ふやうな質で、伶俐な勝氣な氣質があり／＼とその態度に見えてゐた。一目見た奥方は、忽ち氣に入つて、奥方の小間使の格で、其處にゐることになつた。

その時分は、邸奉公は、一面娘を教育する方便であつた。奥方は何の彼のと云つてはよくおてつの世話を焼いた。來てから一月も経たない中に、おてつは、着物を拵へて貰つたり指環を貰つたりお高祖頭巾を貰つたりした。風俗も次第に都會風になつて行つた。飲み込みの早いおてつは

藤の花の咲く時分には、土臭い田舎言葉から脱して、人もふり返るやうな都の娘になつてゐた。

「おてつ、おてつ」

かう言つて、旦那も奥方も姉刀自も可愛がつた。

叔母のおかねは、良太に比べては、元氣の好い、勝氣な質であつた。何ぞと言ふと、家名にかかはるといふことを叔母はよく口にした。お前、そんなことをしては、父さんや母さんの恥辱ばかりではない。岡田家の家名に係はるから、そこをよく考へなければいけないよ。岡田家はこれまでついぞ人に後指さ、れたことはないんだから、言つて戒めた。

叔父と叔母とは、時には口をかへし合つたりするやうなこともないではないが、大抵は叔母が言募ると、叔父はぶつ／＼言ひながらも黙つて了ふのが例であつた。其時分、良太は門前の通りに、遠くから古い家を買つて運んで來て、長屋を建てることについて、大工だの土方だのを指揮して忙はしく暮してゐた。奥から下つた金は、それを一々叔母に預けて、簞笥にしまつて錠をかけさせた。土方の勘定などは、奥の手を煩はさずに、皆なおかねの手から支出してやつた。

良太達の女の兒は、丁度七つになつて、來年からは學校に行くと言つてゐるが、可愛い盛で、終日長く日當の好い縁側で歌を唄つたりおぼさごっこをしたりして遊んでゐた。おてつが奥の用事の際に、其處に行つて見ると、人形を箱の中に並べて、何か獨言を言つてゐた。女の兒は「田舎のねえちやん、田舎のねえちやん」と言つては、おてつの後を追つた。それに引かへて今年十一になる男の兒は、思ひ切つた悪戯子で、母親の言ふこともきかずに、泥いぢりをしたり、近所の池に行つて水泳をしたり、着物を泥まみれにして歸つて來て母親に烈しく折檻されたりした。時には「一體、お前さんが甘かして育てるからわりいんだ。父親の威光がないから、仕方がないから、私が出て折檻すると、この餓鬼は、好い氣になりやがつて、お前さんにばかりついて行く、本當にしようがありやしない」かう言つておかねは怒鳴つた。

## 七

おかねの兄の家内が、子供達をつれて東京にやつて來たのは、その翌年の秋であつた。さういつまでも夫妻わかれて住んでゐるわけにもゆかない。何うやらかうやら生活の方法が立つならば田舎は田舎ですることにして、そつちで一軒持つた方が好い。かう言はれるので、家内は思切つて東京に來て、始めて古い榎の木のあるあたりに一軒、家を構へた。

その以前にも、おてつは正月とか盆とかには何處にも行くところがないので、父親の下宿してゐる合宿所に訪ねて行つて、一日遊んで來るやうなことが度々あつた。それは去年の秋頃であつた。ちよつと、用事があつて、其處に訪ねて行くと、生憎、父親はゐなくなつて、二階には大勢若い巡査が集つてゐた。上るにはあがつたが、きまりがわるくつて困つてゐると、會津の藩士だといふ二十八九の若い巡査部長が見かねて、

「此方へお出なさい。岡田さんは、もうぢき歸つて來ますから」

と言つて呉れた。で、おてつはその時始めて、私は岡田政十郎の娘だと言ふことを述べて、丁寧に挨拶をした。

時は過ぎ行く

その翌日、若い部長は、おてつの父親に言つた。

「岡田さんには、大きい娘さんがあるんですね」

「いや」

「中々別品さんだ」

挨拶に困つてゐると

「何うだらう？ 私に呉れませんか」

「さア」

「好いだらうと思ふんだが」

「私も好からうとは思ふが……」

「ぢや、下さい」

こんな冗談見たやうなことで、その縁談は始まつたが、岡田の案内が上京する頃には、その話は最早すつかりきまつてゐるやうなものになつてゐた。おてつの父親は、若い同僚とは交情が

好く、その氣質やら家庭やらをもよく知つてゐた。その男は石川と呼ばれて、その一家は牛込の方に住んでゐた。

良太もおかねもその話には不賛成ではなかつた。奥方も旦那も好い縁だと言つた。會津では、かなり好いところを勤めた家柄で、昔なら、とてもさういふところへは嫁けなかつたといふことであつた。

その縁は、岡田の案内が東京に来ると、間もなく結ばれた。奥方は錢別に指環だの着物などを呉れて別れを惜しんだ。其結婚の席には、良太も羽織袴で出かけた。

おかねは是非一度兄の家に行つて見たいと思つてはゐたが、子供の世話やら、奥の用事やらで容易に家を明けることが出来なかつた。それに、都の隅と隅とに離れてゐるので、交通の不便な當時にあつては、さう手軽には出かけて行けなかつた。おかねが始めて其家をたづねて行つたのは上京して二月ほど経つてからのことであつた。

嫂は落ちるばかりの腹を抱へてゐるのをおかねは見た。總領の男の兒が十三、次が女の兒で十、

時は過ぎ行く

その次には七つになる男の兒、それでさへ随分重荷であるのに、また出来ては兄も大抵ではないと思つた。嫂はお幾と言つて、三十八、矢張同藩の士族の娘で、おかねが十四から十八九になつてお邸に奉公に上るまでひとつ家にゐて、同じ飯を食つたので、嫁、小姑の間柄ではあるか、長くわかれてゐると、なつかしいやうな愛情が其の胸に萌さずには居なかつた。

「おかねさん、また出来るんで困るよ」

「結構だがね」

「結構なことはひとつもありやしない。總領がもうお嫁に行つたのに、これでは本當に仕方がないつて言つてゐるんだよ」

田舎風の口の利き方やら、野暮な取繕はない様子などが、却つておかねに田舎の生活をなつかしく思はせた。尻上りのアクセント、ぞんざいな言葉づかひ、それを聞くと、おかねは再び田舎にゐた自分に返つたやうな氣がした。

「でも、良太さんは仕合せだ。あの時思切つて東京に出たのが好かつたのだよ。大へん好いつて

いふ噂だよ」

「そんなことがあるもんですか」

「でもお邸が盛んだから、何んなにでも好くなつて行けるからね」

「何が、何だか——」

娘が世話になつた禮を、あとになつてから思出したやうにしてお幾は言つたりした。「まア、まア、あれが片附いたから、それでも好いんだよ。年が少し違ひすぎるし、前に二度もトさんが不縁になつて出て行つた家だつて言ふから、まだ、海のものとも川のものともつかないけれど……」

「でも、石川さんは、警視廳でも評判が好いんだつて、……宅の旦那さんなども、御存じで、よく賞めてゐますよ。おてつが親孝行だから、あゝいふ好い縁が出来たつて言つてゐますよ」

「でも、まアまア、慾を言へばきりがないから……。それに、あの子はませてるて、親のことばかり心配してゐるから、まア、今度のことには好い縁なんでせうよ」

こんな風にして二人は盡きずに話した。何も構ふものはないが、まア、緩くりして泊つて行つ

て下さいと言つて、お幾は自分で肴屋を見に行つたりした。總領の男の兒は「只今」と言つて、やがて元氣よく近所の學校から歸つて來たが、續いて十になる女の兒が「母さん、お菓子」と外から入つて來て、そこに伯母さんが來てゐるのを見て、慌て、風呂敷包を放り出して、お辭儀をした。

「まア、大きくなつたね。内のお初と三つちがひだね。本當に大きくなつた」かう重ねて言つておかねは菓子を二人にわけてやつてから、傍に立てゐる三番目の男の兒の方を見て「そら、お前さんにも一つ。さつきやつたんだから、餘り食べるとボンボをわるくするよ」

「もう澤山だつてお言ひだね。さつきもあんなに戴いて」  
かう傍から母親は言つた。

二人の話は容易に盡きなかつた。一番問題になつたのは、田舎の士族の零落の話で、何處の家では奉還して一時は好かつたがすつかり駄目になつて了つたの、彼處の家は今だに方針が定まらずに主人がぶらぶら遊んでゐて、居食同然だから一家のさまが慘めで見てゐられないの、彼處は

何うの其處は何うのといふ話がそれからそれへと續いた。家老が落魄れてひどくなつた話をした時には「そんなになつたかね。ひどいとはきいてゐたけれど」かう言つておかねは嗟嘆した。

「何でも、これから商人が一番だよ。とても我々では、子供を立派に修業させるといふわけにも行かないから、商人にするのに限るよ。そら、おかねさんは知つてるか何うだか知らないけども元、足輕で、疊が敷けなくつて、藁の上に暮してゐた家があつたかね。あそこなんか、始から困つて、息子を年季にやつたもんだから、今ではその息子が出來上つて、機屋を始めて、それは大したもんだよ。今ぢや、その婆さんなんか、昔のことを忘れて、大きな顔をしてゐるからね」

「さうかね……。百姓にはさう急にはなれないから、何うしても商人だね。宅でなども、もう十三だから何處か好いところへやりたいと思つてゐるんですよ」かう言つたおかねは、此間中二つ三つあつた年季奉公の口などを思ひ出してゐた。

話はそれからそれへと續いた。後には、おかねは奥方の嫉妬深いことなどを話してきかせた。と、お幾は「上つ方でも、矢張さういふ苦勞があるのかねえ。え、え、本當だともね。妾の一人

時は過ぎ行く

六

や二人、あの身分では何でもありやしないんだから、黙つて放つて置けば好いのに……。矢張り供がないからねえ」

「一人でもあると好いんだが」

「本當だねえ」

其處に主人の兄が劍の音をぢやらつかせながら歸つて来て、「お、めづらしい。誰かと思つたらおかねか」

三年間溜めて置いたと言はぬばかりに、其夜は三人して語り合つた。主人の兄は、二合の晩酌を旨さうにして飲んで、「それにしても變つたな、東京は？ 丸で見違へるやうになつた」などと言つた。

其家から遠く隔らない町の角には、賑やかな青物市場などがあつた。其處では、大勢の人々が寄り集つて、カンテラの油煙の高く暗く靡いてゐる下で、わからぬ聲を張上げて野菜の相場をきめてゐた。ある社では、其夜が丁度線日で、いろ／＼な肆が到るところに並んでゐた。總領の男の兒を伴れたお幾とおかねとは、そこらぐる／＼廻つて、別な路を通つて、兄の勤めてゐる警察署の横から折れて、そして家の方へ歸つて來た。

八

その時分、廟堂の空氣が變調を呈してゐることは、度々旦那の晩酌の口から洩れたが、次第に險惡になつて、新聞にまでもその記事が公然と載せられるやうになつた。困つたもんだな。折角これまでにしたんだから、内輪揉めはしないやうにする方が好いんだがな。外國人がその隙間を覗つて、何んな眞似をするかわからないんだから」旦那はこんなことを言つてゐたが、一月二月經つて、年を越すと、いよ／＼戦争は避けることが出来ないといふ形勢になつて來てゐた。

警視廳の詰所あたりにも殺氣が漲つてゐた。零落に瀕して、何か事あれかしと思つてゐた士族は勿論、薩長に酷められた方の藩の侍共は、今こそ復仇の時が來たとばかりに、從軍を志願する

時は過ぎ行く

七

時は過ぎ行く

五〇

ものが、其處にも此處にも集つて来た。

その年の初めに、お幾は男の兒を生んだ。それのお祝に良太もおかねもまだ行つてゐなかつた。お幾は漸く産室を離れて、人並に臺所を働くことが出来るやうになつたばかりであつた。

丁度其時、良太は裏の方の林を開墾して、茶樹を栽培しようとしてゐた。廣い邸址の荒地は、長い月日をかけても、容易に未だ十分の成績を示すことが出来なかつた。それに、此頃、旦那は水車場を一つ經營して、上水の水をひいて、そこに水車を二つ仕かけた。その方にも、良太は出かけて世話を見てやらなければならなかつた。

「おい、おい」

誰か呼聲がすると思ふと、それはおかねが良太を迎へに來たのであつた。良太は林から出て行つた。「ああさうか、今すぐ行くから」かう言つて、それ／＼土方達に用を命じて置いて、そして自分の住宅の方へと歸つて行つた。家には義兄が待つてゐた。

「お上の御用なら仕方がないが、何も此方から望んで行くには當らないと思ふけれど……」

かういふ良太の後について、  
「本當だともね……。何も望んで行くには當らない。女房子のことだつて、心配せずには置かれ  
ないんだから」

と、おかねが言ふと、

「それは、まア、さうに違ひないが、いつまで巡查なんかをしてゐたつて仕方がない。かういふ時に行つて、一働きして來るのが武士の勤めだ。それは死ぬかもわからない。しかし、戦争に行かなくとも、明日死んで了はないとも限らない。何ぞの時には、進んでお上の用に立つのが武士の習ひだ。死ぬことを考へては、戦争などには行かれない」いくらか激昂した調子で岡田は言つて「おてつの亭主にも、もう命令が下つたさうだ！」

「あ、石川さんも行くのかえ？」始めて聞いたやうにおかねは聲を高くして、「それは心配だねえ。おてつは六月ぢやないか」

それには岡田は頓着せず、

時は過ぎ行く

五一



「兎に角、私も行くことにきめて願書を出して置いたんだから……」

「困るねえ、男は。嫂さん、困つてゐるでせうねえ」

「でもな、そんなことは言つてゐられない、その代り歸つて来ればわるいことはないんだから」

「それはさうだらうけれど……」

良太もしかし強つて留めるわけには行かなかつた。良太には、その方の望みは、もうすつかり絶えて了つてゐたけれど、武藝もあり算筆の達者な義兄に、榮達の心を捨てることを望むのは酷であつた。妻子を捨て、も、自から進んで戰場に赴かうとする心は、良太にもよく飲み込めてゐた。

「田舎の方にも昨日手紙を出した」

かう續いて岡田が言つた。

「さう——そつちだつて、考へて見なけりやならない。お父さんだつて、もう年を取つてゐるし母さんはあの通り目が見えないし、もしものことがあつたら、それこそ嫂さんが大變なんだから

年寄、子供を抱へて……」

「それは仕方がないよ」

兄は素氣なく言つた。

「兎に角、何とか國からも便りがあるでせうから」とてもその思ひ立をとゞまらしめることが出来ないのである。良太は、かう言つて話の段落をつけた。

義兄はそはくしてゐた。戦争に誘はれた昂奮した血は、名残なくその全身に満ち渡つて居た。行く行かないよりも、警視廳でやつて呉れるかやつて呉れないか、問題になつてゐるやうな口のき、方であつた。おかねばかりが、唯將來を心配した。

早く歸るといふのを、それでも酒を一杯御馳走して、日が暮れてから、おかねは兄を門口まで送り出した。

「兄さん、本當に考へて見る方が好う御座んすよ」

「まア、國からも、何とか言つて来るだらうから」かう言つたが、やがて襟巻をまきつけた兄の

時は過ぎ行く

妻は、夕闇の中に消えた。

九

兄が戦争に出かけてから、おかねは一度根岸の嫂の家を訪ねた。此處では廣すぎるからと言って、兄が移轉させて行つた家は、小さな川に臨んだやうな處にあつた。二疊に六疊、その隣には版木屋の職人が住んでゐた、死に瀕した老爺が二三日前から炬燵に當り切りであつたが、おかねが訪ねて行つた前の夜、家の羽目から煙が出るので、驚いてお幾が行つて見ると、爺さんは死んで、着物の裾が何かが炬燵にくばつて、危く大事に及ばうとした。「喫驚したにも何にも……。それでもまア大事にならないでよかつたんですよ」お幾はおかねの顔を見るや、挨拶もせずその話を持ち出した。

おかねはさびしい嫂の家を見た。二番目の男の兄は、それでも日當りでおとなしく遊んでゐた

が、今年生れた男の兄は、風邪を引いたかして、咳嗽を苦しむやうにのべつにせいでゐた。「百日咳にでもなると、大變だよ、嫂さん、大事にしないとダメですよ」かうおかねが言ふと、「本當にこの兄はやかましくつて手がかゝつて仕方がない。一體、體があまり丈夫ぢやないのかも知れない」と言つて、お幾はそれを黄縑のねんねこで負つた。お幾に取つたは、長年の田舎生活、舅生活から、不自由勝ながらも、兎に角夫婦水入らずの生活に入つたと思ふ間もなく、俄かに夫は出征して、僅かの間の楽しい生活も忽ち夢と過ぎ去つて了つたのを悲しまずには居られなかつた。「何うせ、女はかうですよ。一生苦勞するやうに出来てゐるんですよ」

かうお幾は眼に涙を浮べて言つた。

續いておつが訪ねて来た話などをお幾はした。大きなお腹を抱へながら、別段悲しいやうな顔も見せなかつたことや、それと言ふのも、大勢の子供を抱へた母親に悲しい思ひをさせまいとする健氣な心からであつたらうといふことや、「母さんだつて、武士の妻だから、そんなにくよくよ思はない方が好い」とあべこべに慰めて歸つて行つたといふことなどがそれからそれへと語

時は過ぎ行く

り出された。それに、石川は隊長になつて行つたんだから好いけれど、家なんか、本當に、行けとも言はれないのに、狂氣のやうになつて、出かけて行つたんだから……。本當に家のことなんか少しも思つてゐないんだから。それに、國からも、無論留めて来たんですけれども、そんなことには頼着しようと思はず、私が、もしもの時は、あとは何うするんですのつてきくと、なるやうにしかにならない、好いやうにするさと、かうなんですからね。丸で手がつけれなかつたので「すよ」と言つてお幾は滴した。

新聞はあつたけど、其時分は、今のやうに早く詳しく、戦地の状態が此方には知れ渡つて來なかつた。おかねと良太とは、却つて旦那の晩酌の話の中からも戦地の模様を知つた。何うも思ふやうに戦争が運ばない、熊本が危ない。それを援けに後から廻した方の旅團の中に、石川も岡田もゐるんだが、その方面よりも、却つて前の方面の方の賊軍が強い。など、旦那は言つた。熊本が救はれた報の達した時には、「まあ、好い鹽梅だ。今度の戦争には、賊軍も大分痛手を負つたらしい。石川や岡田の入つてゐる方の旅團と熊本とが第一の連絡が取れた。その様子で見ると、其方

の方面でも、随分激しい戦争があつたらしい」と旦那は話した。そして、「これさへすめば、もう大して大きな戦争もあるまい」かう旦那はつけ足した。

戦地に行つた義兄からは、良太の許に一度便りがあつたばかりであつた。梅の花が散り、門前の吉野櫻が散り、野椿の赤い花が黒い春の土の上にくつとなく重つて落ちた。雪消の水が山から押して來るので、良太はをりく、水車場の方に水の調節をはかりに出かけて行かなければならなかつた。續いて、笥の季節が來て、竹藪の中には、それを買ふために、大勢の商人が集つて來た。それを監督したり、値段をきめるために買手をせらせたりして、良太は忙はしく暮した。良太は買手から金を受取つて、一々それをおかねに渡した。

義兄の戦死の報は、一番先に石川からおつての許に知らせて來た。警視廳の方でも、わかつてはるたけれども、まだ公然に遺族の許に知らせる段取にはなつてゐなかつた。一戦争すんで、他の同僚の家々には便りが來るけれど、家には何うしてかやつて來ない。お幾は心配で、心配で仕方がないので、十三になる總領の男の兒を牛込の石川の家によつたり、良太の許によこしてゐた。

おてつはその報知を得ると、母に知らせる前に、先づ良太の許にやつて来て、その話をした。良太は黯然として、「は、は」と言つて低頭して聞いた。それに引かへて、おかねは、「だから、言はないことぢやない。死ぬ當人は、勝手に死ぬんだから構はないけれど、あとを何うするんだつてあんなに言つたんだ」涙をばら／＼と落しながら言つた。

丸鬢に結つたおてつは、青白い昂奮した顔をして、黙つて坐つてゐた。涙は流し盡して、もうなくなつたといふやうに見えた。「でも、お前の體だつて大切だよ。もう今月ぢやないか」かう叔母が言ふと、「い、え、私なんか何うなつたつて構ひませんけれど、母さんが何んなだらうと思つて……」かう言つて、そつと涙を襦袢の袖で拭いた。其夜、良太は根岸の家に嫂を訪ねた。

奥方は言つた。「まア、ね。あの子の氣丈なこと。母さんのことばかり心配してゐるんだよ。親孝行な子だねえ」

おてつはこの悲報の中で、やがて女の兒を生み落した。おてつは、初産であり、夫は留守であるが、じつとしてきまつた日數を産室の中に過してはゐられなかつた。自分が慰めてやるより他

に、自分が力になつてやるより他に、何うすることが出来ない母親をおてつは思つた。母親がおてつの産室を訪ねて来た時には、人目もあるので、互に泣顔をも見せることが出来なかつたが、お宮詣がすんで、おてつが出懸けて行つた時には、親子は折重るやうにして泣崩折れた。慰めたり力をつけてやつたりしやうと思つても、それが自分から泣き崩れて行つてゐるのをおてつは見つた。「仕方がないよ。母さん。これから皆なして、力になつて行くから、心配しないで御出なさいよ。これもかうなる運だから仕方がない」かう言つてまた親子は泣いた。

お幾はお幾で、「それで、石川からは便りがあるかえ。お父さんは、それでも、もう年を取つてゐるんだから仕方がないけれど、石川はまだ若いんだから」かう言つて涙を飲み込むやうにした。

おてつは、自分が今は他人の妻で、一緒にゐて力になつてやることの出来ないのを歎きながら日が暮れない中に、牛込の方へと歸つて行つた。

悔んでも歎いても仕方がなかつた。さうしてゐる中にも月日は経つて行つた。戦争は段々下火

になつて遺族の許に戦死者の遺品の届いて来る時分には、もう賊軍の掃蕩されるのも目に見えるやうになつてゐた。石川はある戦争で、指揮刀を持った手に銃丸を受けて、水俣から長崎に引返して病院に入るやうになつたが、それを聞いた時には「父さんも、早く何處かに少しでも怪我をすれば好かつたに……」そつとお幾はおてつに言つた。

田舎から老いた舅が上京して、一家をまとめて、再び其方へ歸らうとする時分には、もう戦争がすんで、石川も無事に凱旋して來てゐた。一年はいつか經つて行つてゐた、良太が先年から開墾した林は、最早半は茶畑になつてゐた。

戦争の濟んだ後の東京は、更に一層の賑かさと生々しさを加へてゐた。錦繪を賣る店には、戦争の錦繪、凱旋の錦繪などが一杯に下つて、人が大勢立つて見てゐた。車と馬車とは織るやうに市中を通つてゐた。料理屋からは、凱旋した軍人達の騒ぐ氣勢が手に取るやうにきこえた。

老いた舅は、

「變つたなア、丸で、もとの江戸とは思はれない。何處を歩いてても、在番で來た時分の様子はな

い。今日も大通を歩いて見たが、家のつくりからして變つた」

かう驚いたやうに言つた。老いた父親の眼には、町人と侍との區別がつかずに、人が皆なザンギリで無腰で歩いてゐるさまが不思議に見えた。それに、箱馬車に乗つて出勤して行く大官の金モールもめづらしければ、外國人のそこら平氣で夫婦腕を組んで歩いてゐるのもめづらしかつた。始めて駿河臺の邸に、舊藩主を訪ねて行つた時には、昔に似合はず、殿様の打開いた軽い態度に涙がこぼれるやうな氣がした。昔ならば……十萬石の殿様で、軽いものなどには、ぢかにはお目通りが出来なかつたのに……。それなのに、殿様はづか〜と手輕に端近にお出ましになつて、岡田は可哀相なことをしたが、國家の爲めだから餘り嘆かぬやうにと仰しやつた。それが、堪らなく勿體ないやうに父親に思はれた。

父親は良太の二階に三日ほど泊つて行つた。良太夫妻が、兎に角早く決心して、東京に出て一廉の生活をしてゐるのが、父親には此上もなく力になるやうに思はれた。おかねの元氣で働いてゐるのも頼もしかつた。九段の邸に行つて、姉娘のおつるにも逢つた。

奥方も姉刀自も、父親は昔からよく知つてゐた。奥方の父に當る江戸家老をした人には、ことに世話になつてゐた。稚い奥方から「彦太や、彦太や」と言つて、慕はれたものだ。主従らしい関係があるから、應對には言葉の區別がちやんときまつてゐるけれど、お互になつかしい気分はその中にも流れてゐた。「彦太はまア年を取つたな。いくつだね。六十五、それぢや、もうさう元けるのも無理はない」などと奥方は興じた。姉刀自も滅多に出て來ない二階の居間から、聲をききつけて下りて來て「今度はまア、政十郎がなくなつて、残念なことをした。しかし、お國の爲めだから……。あまり嘆いて體をこはさないやうにしなければいけない。これからは、嫁と子供ばかりだから、お前に若い氣になつて、しつかりしてゐて貰はなくつては仕方がないよ。おかねもおつるも心配してな」かういふ挨拶から、話は段々昔の方へ飛んで行つて奥の世話を申上げた時分のことからそれからそれへと盡きずに話された。「松江に行つた姉が、よく來てはお前の噂ばかりして行くよ。あれもね、旦那が立身しないから、餘り樂には暮してゐないけれどね。今でも、時々歌なんか詠んで、彦太がゐればつて、いつでもお前のことを思ひ出してゐるよ」などと、奥方は言つた。

で、其夜は「彦太は好い酒が好きだから」と言つて、キの正宗を御馳走になつて、若い時から癖の古い唄などを歌つた。「久し振りで彦太の唄をきいたよ。何だか大名小路にゐる時分の心持がする。本當にね、何も彼ももう昔になつた」かう言つて姉刀自は昔を思ふやうな顔をした。父親はあくる日は半日、邸の中を彼方此方と良太に伴れられて歩いた。竹藪、茶畑、梅林、そこにかれば婚の努力の一通でなかつたのを見た。良太は種々なことを説明してきかせた。

「これは大事だ、これまでにするには、並大抵のことでは出來まい。……矢張、地面がわるいから、茶なんか好いかな。これは好いところに思ひ附いた」

こんなことを言ひながら歩いた、大きな松の樹の下に來た時には「これは、これで餘程古い。私がよくこの下邸に來る時分には、丁度此處のところの御殿があつて、この松が、かう座敷から見上げて見えるやうになつてゐるが、何でも殿様の御先祖が谷村からお上りになる時分からあつた松だと言ふことだ。一體此處の邸は、お家の先祖が、甲州の谷村から來ると、一日路で、日暮

時は過ぎ行く

に此處に着くので、始めは庄屋などに宿を取つてをられたが、何うかして一軒、邸が欲しいと言ふので、それで、此處に地處を買つて、下邸をお拵へになつた。もとは、あの十二社の熊野の社が此處にあつたといふことだ。だから、御維新の時にも、此處の邸だけは、お上に返さなくとも好かつたのだ。その谷村時分からあるんだから、この松はもう餘ほど古い」かう言つて、空を凌ぐばかりに高く聳えた老松を仰ぎ見た。

それから良太は、奥の林や草藪の方へも伴れて行つた。かなりの年月を経たけれども、まだ其方の方は少しも手が着けてなかつた。「矢張、旦那が時々氣が變るもんですから、手を着けやうにも手が着けられないんで困ります」と良太は説明した。

「それで、これは、お上から、しまひには旦那が頂戴するやうになるのかな」

「いづれ、さうでせう」

「大したもんだな」

かう言つて、老いた父親は、腰を伸すやうにしてあたりを見渡した。

老いた父親は、其時おてつこの嫁いてゐる牛込の家にも訪ねて行つた。折角出京して来て寄らずにも行かれなかつた。其處では、石川の老父とおてつこの老祖父とが始めて相對した。石川の老父は、會津藩でもかなりのところをつとめて、維新の亂には、農兵を募集して、南會津口を固めた一人であつたが、漢學も出來、漢詩も作り、武藝にも達してゐた。がつしりした體格をしてゐた。會津訛と關東訛とは、話してゐながら、且によくは飲み込めないやうに見えた。時々、とんちんかんの言葉を取交した。それをおてつははらはらしながら、絶えず傍から訂正した。「お父さんの言葉はちよつとわからないから」などと笑ひながら言つたりした。おてつは、髪を丸髷に結つて、いつの間にか、かういふ立派な一人前の奥さんになつたかと思はれるやうな風をしてゐた。老いた父親は、遠慮勝に、酒の御馳走になつて其處を辭した。

田舎に歸つては、もう今までのやうに度々逢ふことは出來ないからと言つて、惜別のつもりで石川は一日、お幾と子供達とおてつとを伴れて、護國寺から王子の方へと遊びに行かうと言つた。其時、おかねも老いた父親も誘はれたが、父親は辭つて、おかねだけが行くことになつた。で、其

時は過ぎ行く

日は人々は皆な牛込の家へと落合つた。行く間際になつて、おせつといふ石川の妹も一緒につれ立つた。

俵を一臺頼んで、代る／＼乗つて行つた。暑い夏の日で、太陽が上から燦けるやうに射した。縁の蔭を求めては、人々は息つくやうにして休んだ。おかねの額からは、汗がぢり／＼流れた。「角筈のをばさん代つて乗つたら何うです？」かう度々石川から勧められたが、おかねは、俵なんかと言つて、すん／＼歩いた。後では疲れたと言つておせつが俵に乗つた。

緑葉に埋められた川の畔の茶屋に着いた時には、人々はほつと呼吸をついた。何處かで瀧の落ちる音がして、涼しい風が明放つた。川の縁にある吹井のほとりで、おかねが冷めたい水に顔を洗つてゐると、二階の欄干から總領の男の兒が見下して聲をかけたなりなどした。抱いた兒に乳房をふくませてゐるおてつのは、お幾が坐つて團扇をつかつてゐた。

戦死さへしなければ、——石川のやうに無事で歸つて來ての保養ならばといふ腹が誰にもあつて一座には何となく微かな哀愁が漂ひわたつた。お幾とおてつには殊にその情が深かつた。お幾

は田舎に歸つて老人と子供を相手に暮さなければならぬ生活を想像した。艱難の多い生活ではある。其日々々の苦勞に追はれて、まだ少しも楽しい思ひもしたことのない中に、人生の半は早くも過ぎて、その眼の前には、何の希望も色彩もない生活が佗しく横つてゐるのをお幾は見た。「かうして、娘と婚と一緒に遊ぶのも今日ぎりだ」かう思つて、お幾はそつと涙を袖に拭いた。「實が大きくなるまでは、しやうがないよ。嫂さん。なアに、經つて見れば、ぢきだよ。今、十三だからあと五六年も經つと、物心がついて來るからね」などとおかねは言つた。

そこはその頃東京の人達の遊びに來るところだけあつて、料理も旨く、座敷も綺麗に、女中達にも品の好いのが多かつた。人々は兎に角楽しく暢々した氣分で半日遊んだ。次男の男の兒が大きな一人前の膳を前にして坐つてゐるさまなども、後には大きな記念になつて、人々の頭に残つた。

日が蔭つて、かな／＼蟬の鳴く頃、別に俵を頼んで、皆なてんで別れて自分の家の方へと歸



つて行つた。時は遠慮なく経つて行つた。

それから十日ほどして、お幾達は、老いた父親と一緒に、悲しい根岸の家を疊んで、俵で川舟の出るところまで急いだ。そこには良太と石川とが見送りに來てゐた。良太は父親に代つて、何彼と荷物のことなどの世話をした。舟が岸を離れやうとする時、良太は船頭に呉れぐも言つた。「年寄に女子供だから、よく面倒を見てやつてお呉れよ。頼んだよ、い、かえ」舟は出て行つた。遠くなるまで、良太は其處に立つて見送つてゐた。

十

良太は同じやうにして、毎朝草鞋をつけて出懸けた。林と、畠と、廣い空と、唯そのみを相手にして暮してゐるかれには、世の中は丸で自分には關係がなくなつたもの、やうには見えた。世の中は何うなつて行かうが、何う開けて行かうが、それとは丸で没交渉であつた。かれは大抵

は戸外に出て、草を刈つたり、垣を直したり、茶樹を栽培したりして暮した。そして夜は女の兒を抱いて寝ることを楽しみにした。

しかし世の中には種々なことがあつた。かれの近所の百姓達の身の上にもかなりの變遷があつた。ある百姓の息子は、東京の繁華にかぶれて、金を持出して家出をした。ある老いた百姓は、何も原因もないのに、ある朝、梁に繩をかけて縊れて死んでゐた。ある植木屋は、高い木の上から足を踏外して不慮の死を遂げた。近頃出來た小料理屋の酌婦は情夫が迎へに來て逃亡した。

「大變だ、大變だ、水車場で情死があつた！」

ある朝、かう言つて、近所の男が知らせて來たので、良太は草鞋を附けて、そこへに出かけて行つた。それは寒いく朝であつた。霜が白く地上に置いてゐた。氷つた樹々の間からは、朝日が朗らかに登り始めてゐた。

上水には、水が満々とたたえてゐた。岸には、低い眞竹の藪などがあつて、枯れた萱やら薄やらが靜かに朝風に靡いてゐた。良太は霜の白い板橋をわたつて、畠の縁を横つて、そして水車場

の方へと行つた。

「甚さんの家の息子だ、男は！」

かう向から来た百姓は言つた。

「相手は？」

「何處の娘だかわからねえ」

やがて水車場に入つて行つた良太は、その息子と誰だかわからない女とが鋭利な刃で互に喉を突いて、折重なつて死んでゐたのを見た。女は赤い帯をしめて、顔を向うに向けて、髪を振亂してゐた。

「やれ、やれ、大變なことをやつた」

良太はかう言ふより他仕方がなかつた。

「甚さんとこへ知らせたか」

「今、達公が行つた」

始めてそれを發見した男は、向うの村の鐵といふ水呑百姓だが、今朝、米を少し搗かうと思つて、戸を開けて入つて来た。と、其處等に紙などが散ばつてゐて、誰かゐるやうな氣勢がした。まだ、少し薄暗いのでよくわからなかつたが、てつきり村の若い者が嬉曳の場所にしたなと思つて、わざと氣をきかして遁ける餘裕を與へるために、少しそこでまご／＼してゐた。と、急に唸聲が中でした。「まさか、こんなことがあらうとは思はねえから、何をふざけてゐるやがるんだと思つて、入つて行つて見ると、この始末、びつくらしたのにもなんにも。私や腰を抜かして了つた。来た時は、女の方はまだ呼吸があつたんだ……。それから俺は前の衆さんとこへ走つて行つて、一番前にお邸へ知らせて貰つた」

「困つたことをしたな」

良太はかう言つて嗟嘆した。甚さんとはかねて懇意の仲である。そしてこの息子は一人息子である。親が聞いたら、何んなに歎くだらうと思ふと、良太は人事とは思つてゐられないやうな氣がした。取敢へず醫師を呼びにやつたりしてゐる中に、急報を得た甚さんは、蒼い昂奮した顔を

して急いで駈けて此方に來た。

「とんでもないことで……」

良太がかう挨拶するのを聞く暇もなく、慌て、水車場の中に飛込んで行つた甚さんは、「野郎、あきれた真似をしやがつたな」かう言つて其處に突立つた。

甚さんの老いた體がぶる／＼戦へてゐるのを人々は見た。

暫くしてから、「女つ子は、幡ヶ谷の照公の娘だ。こんなことにならなけやい、がと思つてゐやしたよ」かう言つた老百姓の眼からは涙が流れた。惚れ合つてゐる中だが、身分が違ふからと言つて、甚さんは二人を一緒にすることを拒んだ。つい二三日前にも、息子は親の監督の眼を忍んで、女の許に遁けて行つたりした。

「昨夜もるねえから、また、親の眼を盗みやがつた。明日歸つたら、家に寄せるななんて言つて寝やしたが、こんな真似をしやがるとは思はなかつた……」甚さんは續いてかう言つたが、長く見てゐるに忍びないといふ風にして此方に出て來た。

つい一月ほど前に開業した若い醫師がやがてやつて來たが、もう何うすることも出来なかつた。で、検視が済むのを待つて、死骸を別々に車に乗せて、銘々の家に引取つて行つたのは、それから一時間ほど経つてからのことであつたが、その時分には、朝日は既に高く登つて、竹藪の中を流れて來る上水の上いきらきらと美しく輝いてゐた。水車場の入口のところ、良太が見てゐると、親類の百姓達に扶けられて、死骸を載せた車と一緒に、老いた甚さんがとぼ／＼と阪を上つて、大きな棒の並んだ路の方へ歩いて行くのが物悲しげに黒く見えた。良太は思はず深い溜息をついた。

水車場の中では、若者達が寄集つて、「中々この血の痕は取れねえ。追々取れるのを待つより他にしようがねえ」などと言つて、ごし／＼たはしで板の間や柱などを洗つてゐた。

家に歸つて、その話を旦那に申上げると、「ほ、それは可哀相な。若い者はそれだから困るな。すぐ思詰めて了ふからな。一人息子だから、甚公泣いてゐたらう？」などと旦那は言つた。「いやだねえ、この寒いのに、情死なんて……」奥方はかう言つて眉を蹙めた。

甚さんに限らず、良太は多くの近所の百姓達と懇意にした。村の交際では、良太は一面旦那の代理をもつとめなければならぬやうな位置に身を置いてゐた。で、婚禮の席にも葬式の見送にも、良太はいつも羽織袴で出かけて行つた。百姓達は青山さんと言つて、いつもかれを上座に迎へた。

百姓達は大抵烈しく労働した。この地方では、米は陸稻ばかりなので、初夏の麥を主なる收穫としなければならなかつた。従つて秋よりも夏が賑かであつた。麥を打つ連枷の音が一村に響く頃には、若者の唄がそこにも此處にもきこえた。頬の赤い娘達は、新しい手拭を頭にかけて、麥刈やら麥打やらに精々と働いた。その時分には、上水の土手の上に、いつも白く卵の花が夕闇を縁取つた。

百姓の中には、副業として土方をしてゐるものもあれば、山師を職業にしてゐるものなどもある。山師の定さんは、大きな丈夫な體に、鉞をふり上げて、終日長く林の伐採に力を盡した。ある日その惚れた上さんが男を拵へて遁けて行つた時には、定さんは子供を抱へて、がっかりして、仕事にも出る元氣がなくなつてゐた。それを良太は訪ねて行つてなだめたり賺かしたりした。

ある家では、良太が行つて、度々その夫婦喧嘩の仲裁をした。芝を仕立て、芝留といふ名を取つた大きな百姓の家は、橋を渡つて、丘を越えて行つたところにあつた。家の周圍は大きな樺で取圍まれて、中にある茅葺屋根は、古く押潰されたやうに見えるが、水車の水のこと、良太は度々其處に訪ねて行つた。始めは大分その話に廉が立つて難かしかつたが、誠實な公平な良太の意見は、間もなくその老いた百姓を納得させた。何處に行つても、良太はその味方と友達とを發見した。

邸の門前の街道は、都會の膨脹につれて、次第に賑かな光景を呈して來てゐた。最早、良太が始めて出て來た時のやうにさびしくはなかつた。田舎から都會に出て來る百姓を常得意とする種物屋、鹽物屋、一膳めし屋、あま酒屋、さういふのが軒を並べた。新しく出來た乾物屋の店の前には、いつも馬にふすまを食はせるための荷馬車が二三臺留つて、上さんがせはしく馬方共に應對してゐる傍で、馬はいばりを瀧のやうに流した。この馬鹿野郎、また食ひながらやらかしやが

時は過ぎ行く

るなど、大きな聲で馬方は怒鳴つた。

蕎麥屋も出来れば、牛肉の煮込屋なども出来た。そして、さういふところには、綿フランの襟巻をした百姓や、赤い腰巻を出した娘などが入つて食つて行つた。汚い、支那にでも行かなければ見られないやうな汚いめし屋などもあつた。街道に面したある百姓家では、副業に其處等  
で出来る竹を利用して、柄杓やさ、らを作つて、それを都會の方へ運び出した。

あるところからある處へ通ふ圓太郎馬車が毎日喇叭を鳴して通つて行つた。と、そのあとを子供の群は面白がつて遠くまで追ひかけて行つた。その中には、良太の總領の男の兒なども雜つてゐた。

朝の七時頃、いつもきまつて役所に出勤する旦那の俵は、色の白い脊の高い定さんに曳かれて、門を出てその街道を通つて行つた。紋附の羽織と仙臺平の袴と山高の帽子とラッコの襟巻とは、いつも街道の人達の目を惹いた。

十一

九段の邸を引上げて、妾と一緒に居るが此方に住むやうになつたのは、それから一年ほど経つてから後であつた。若い妾は、細面の色の白い脊の低い女であつたが、姉刀自の二階の居間に接した六疊と三疊との間を宛がはれて、當分、其處に同居することになつた。

九段の邸は高い價で賣拂はれた。  
妾が同居するやうになつたのは、始めは實は奥方の賛成から話が始まつたことであつたが、さ  
て一緒に居ると、種々むづかしいことが日毎に起つた。表向では、奥方も妾も至極仲が睦  
まじいやうに見えもし、行ひもしてゐるが、裏に入つて見ると、凄じい暗流が避くべからず巴  
渦を巻いてゐるのを誰も見た。

妾はおつまと呼ばれてゐた。旦那とはもう四五年も一緒に住んでゐて、もとはさる藩の立派な

時は過ぎ行く

ところの娘であつたが、父母に死なれて零落の淵に沈みつゝあつたのを、旦那が不憫に思つて拾ひ上げて来たのであつた。琴も出来れば和歌も出来た。殊に、父親は漢學者で、聖堂で講師の一員に加はつてゐたほどあつて、漢詩などをも見事に作つた。旦那の即吟に次韻することなどもをり／＼はあつた。その才を旦那は殊に愛してゐた。

おつるは長年妾の世話をしてゐたので、何うしても其間に友情が出来て、奥方よりは寧ろ妾の方にその心を寄せ勝ちであつた。奥さまも、そんなに仰しやらなくつても好いのに……。大家の奥さまらしくしていらつしやれば好いのに……。餘りだと思ふことがよくあるよ。一方がおとなしいから、あれでもをさまつて行くけれども……。もう少しすれてゐては、とても黙つておとなしくしてなんかるれやしない。本當に、やさしい素直な人なんだから。かうおつるが見兼ねて滴すことなども度々あつた。

妾はかういふところのお部屋様に似合はないやうな質素な扮装をして、よく良太のゐる室に來ては話した。奥方づきのおかねでさへ、わるく思ふことの出来ないやうな人で、時には良太の女の兒を伴れて行つて、物を呉れたり髪を結つて呉れたりした。それをまた奥方に見られるのをおかねは憚つた。

それにも抱らず、女の兒は、「おつまさま、おつまさま」と言つては、よくその後を慕つた。おつまが庭を歩いてゐる姿などを見ると、遠くから願けて行つて、その長い袖にぶら下つたり何かした。「この子は、本當に、私の子のやうですよ。何うして、かう、私がすきなんです？ え、お初ちゃん」こんなことを言つて、おつまは慈姑の把手のやうな髪を結つた女の兒の頬に口を當てた。

良太が外で仕事をすると、その傍にやつて來て、

「山櫻ツて好いもんですね」

「え、これは、旦那が御維新の前に、上方へ天子様の陵をお調べにいらした時、吉野の後醍醐天皇さまの陵の傍から實をお持ちになつて、お國で蒔いたのを此方に持つていらしたのです。もう十八九年にもなりますが、大きくなりました」

時は過ぎ行く

「さうですか、これが……。後醍醐天皇さまの陵の傍にあつたんですか」かう言つて感興を惹いたやうにして梢を見上げて、「わづかの間に、こんな大きくなるもんですかね」

「櫻は一番よく此處等の土地に合ひますと見えて、七八年も経つと、見違へるほど大きくなりま

す」

「さうですかね」  
かう言ひつゝ、猶暫く立盡して、櫻の落花を見てゐたが、その日、旦那が歸つて來ると、五言絶句を一首紙に書いて、そして旦那に見せた。旦那は歴史家で、會つて勤王論を唱へただけに、南朝、殊に後醍醐天皇の御一生については、言ふに言はれない憧憬の情を常に抱いてゐた。後醍醐天皇の夢を見て、夜半に聲を擧げて泣出したことなどもあつた。

それに、其時分の大官連は、妾を蓄へるといふことを一種の見得にしてゐるやうなところもあつた。奥方に子供の無いといふことも、その理由の一つになつてゐた。

姉刀自は、何方かと言へば、妾最良であつた。平生、物事を氣にしない方で、時々芝居へでもやつて貰ひさへすれば、あとは何方つかずに、自分の居間におとなしく引込んでゐる方であつたが、それでも時には見兼ねて、奥方に意見を言つた。「あんなやさしい子を相手にして、何もそんなにお虐めなさるもんでありません」などと言つた。

奥方の態度は常に種々に變つた。馬鹿に機嫌が好くつて、櫛、笄などをおつまにやつたり、何かする時には、本當の妹かと思はれるほどにやさしくしたが、それが時の間にがらりと變つて、呼んでも返事もせず、焦々して髪に當り散らしたりなどした。朝から顔に赤く血が上つて、ヒステリカルな表情をしてゐることなどもあつた。かと思ふと、風呂の後を長い間鏡臺の前に坐つて、何うかしたかと思ふほど一本一本後れ毛を撫でつけて、十年も前にやつたやうな厚化粧で夕飯の膳に向つた。さういふ時には、奥方はいつもピリ／＼しておつまに當つた。

おつるは長い間、旦那と奥方との世話をして來た。容色がわるいので縁が遠く、二十五で漸く嫁いたところも、一年ほどして歸つて來てからは、一生奉公と決心して、旦那が城外に幽閉されてゐる時分には、骨身にかへてお世話を申し上げた。旦那と奥方の爲めには、自分の小遣で、米

を買つて来たことさへもあつた。それなのに、今になつて、旦那も立身して、いかやうにも此身の世話が出来る身になつてゐながら、世話をして呉れないばかりか、箸の上下に酷らく當られるのを黙つておとなしく受けてはゐられなかつた。お妾のことだつて、何も自分がわるいのではないし……「本當に馬鹿々々しい」とおつるは思つた。

「あ、もう、つくづく世の中がいやになつた」かうおつるはおかねに言つた。

しかし、おかねにしても、姉の心をよく汲取ることには出来なかつた。それは姉さんにしては辛からうと思はぬではないが、亭主がなかつたり子供がなかつたりするのが結句氣樂で羨ましかつた。「姉さんなんか一生、此處でお世話になつてゐれば、それで好いんだ。けども、私なんかこれ出来ない。子供といふものがあるから。子供までお世話になるわけには行かないから」かうおかねはおつるに言つた。

おつるはをりく田舎にゐる父母や、戦死して世を早くした兄のことなどを、夜、床についてから思ひ起した。艱難の多い世の中である。何處に行つても、何處を見渡しても、幸福といふも

のではない。それも、昔の殿様の世ならばまだ面白い可笑しいこともあつたらうけれど、かう世間が移り變つては、何うなつて行く此身であるかわからなかつた。それに、おかねに比べては、おつるは稚い頃から父母と氣が合はなかつた。縁が遠いので、父母から持扱はれた時分の苦勞などをおつるは思起した。

おつるは姉刀自に言つた。「お姉様などは御心配のことなどは御座いませぬ。旦那さまがしつかりして在らつしやいますし、それに、彼方にだつて、置いて在らした實のお子さんがおあんなさるんですから……何ぞと言ふ時は、屹度お力になるにきまつてをります。それから比べると、私なんかひとりぼつちですから……誰も構つて呉れるものは御座いませぬ」

「そんなことがあるもんかね。おかねだつて、両親だつてあるぢやないか。それに、兄妹に子が多いんだから、好加減な時分に貰つて育てれば何でもないぢやないか。今からお初でも貰つて置くと好い」

「駄目で御座いますよ。おかねなんか私に私の心なんかわかりやしません。せめて、兄でも生きて



みると、ちつとは相談相手になつて呉れたんですけども……」

「本當だね。政十郎は何が戦争なんかへ行つたんだらうね」

「ですから、奥さまなんかに種々なことを言はれますと、身も世もないやうな氣が致しますよ」

「なアに、あれは、お前、おつまがるから、あんなことを言ふんだよ」

「でも、奥さまもあんまりわからなさ過ぎるんですもの」

おつるはかう言つて涙を袖に拭いた。

痛い奥方の小言を聞かされた上、あられもない金時計の紛失の疑ひをかけられた時には、さうでなくつてさへ長い獨棲の神経性のおつるは赫とした。二語三語、言葉を反したが、それを聞いた奥方は眼を吊し上げて、長い煙管で、子供でもあるかのやうに幾つとなくおつるを打擲した。

「奥さま、何をなさいます。好い加減になさいまし。召使でも、岡田彦太の娘です」おつるはかう叫んで、思はず主に手向ふやうな形を見せた。

おかねだの良太だのが寄つてたかつて、奥方に喰つてか、つてゐるおつるを引離し、兎に角お

詫をさせて、自分の居間に引込ませたが、おつるの心は、それだけではすまされなかつた。おつるはランプの下で、長い間か、つて、手紙を三通書いた。そして人の寢静まつたのを待つて、剛の手水鉢のある雨戸を一枚明けて、そこからそつと跣足で戸外に出た。丁度その時、遅い月が樹の間に上つて、濃淡の樹の影を美しく庭に織り亂して居た。おつるは扉のかけ金を外して庭の外に出た。

あくる朝、人々はおつるのゐないのに驚いて、大騒ぎをしてあちこちをさがした。やがて誰も彼も庭の外にある古井戸の周圍へと集つて行つた。男が入つて行つて、水にひた濡れた、髪が亂れたおつるの死骸を引揚げて來たのを見た時には、「姉さん、何故こんなことをして呉れた」かう云つて良太は泣いた。

「呆れた姉さんだ……」

かうおかねは叫んだ。

奥方に小言を言はれた位で死ぬ譯がない。それには他に何か深い譯があつたに相違ない。かう

誰も彼も噂した。おまつは大勢の中からちよつと一目おつるの死骸を見たが、自分のために死にでもしたやうに、終日二階の一間に籠つて眼を泣き腫らしてゐた。手紙は良太に一通、旦那に一通、父親に一通、いづれも寢床の下に置いてあつたが、長々御世話になつた禮と、かうした不心得をする訛言とばかりで、他に理由らしい理由は書いてなかつた。旦那に宛てた方には、別に手紙は残して置かないが、おつま様に宜しくと書いてあつた。

田舎にはすぐ電報で知らせたが、父親が上京するのを待つわけにも行かないので、檢視のすむまで、一夜死骸を良太達の住んでゐる方の室に置いて、お通夜をして、あくる朝、例の街道の奥にある寺へ送つた。

墓は切腹した侍達と尙儀の番人の埋められた隣へと深く掘られた。おかねは泣きながら、線香と水とを手向けた。

やがて父親は上京して、娘の不心得の訛言を旦那や奥方に述べた。何うも、昔から、氣の狭い女でしたから、何か思ひつめて急に赫と致したのでせう。何もその位のことと、とやかう申すわけが御座まいせんから。かう父親は言つたが、先に子息を失ひ、今また娘を失つた悲哀はありありとその態度と言葉とに見えた。父親は更に一層老いたやうに見えた。父親は死んだ娘の身の廻りの持物などを處分すると、牛込の孫娘の許にも寄らずに、急いで田舎へと歸つて行つた。それから妾は二月ほど其處にゐたが、やがて再び別居した。

十二

一度良太は暇を貰つて、田舎の方へと訪ねて行つた。

良太の眼には、何よりも先に零落と荒廢と絶望との士族屋敷の光景が慘ましく映つて見えた。大手の門を入る時から、かれはあたりのさまに驚かされたが、大名小路に来て更に一層驚愕の眼を睨らすには居られなかつた。昔話の浦島が子もかくやと思はる、ばかりであつた。

大手の門は、あの時の火災に焼け落ちたが、それは知つてゐるが、その傍に、田舎の町らしく

酒屋が五六軒出来てゐるのが、先づかれの眼を惹いた。そして其處から少し来ると、家老の大きな邸のあつた址はすつかり畑になつて、その向うに、小さい新しい家などが見えた。以前に見たこともない家には、細い煙突から薄い煙が立つて、機業でもやつてゐるらしく、中から座繰をくる音が時雨のやうにきこえた。

田舎はひどくなつたと言ふことは、かねて度々人の口からも聞いて知つてゐたが、良太はこれほどではないと思つた。火災後は、殆ど家らしい家も立たないと言つても好い位であつた。昔は邸と邸で埋られたところは、多くは畠や栗林になつてゐて、麥の穂が靜かに春の日影に靡いて見られた。菜の花などが處々に咲いてゐた。

少し通りから入つてゐるので、その時焼けるのを免かれた戸部さんの家は、それでもまだ依然として昔の面影を保つては居たが、壁は落ちたり、庇が傾いたりして、屋根には草が茫々と生えてゐた。

それから少し来た良太は、また驚いて足を留めた。お城を取巻いた壕、その壕の土手の上には何百年と経つた古い松の大樹が美しく靡きわたつてゐたのだが、今は其の影も形もなく、土手には草が繁り、綺麗であつた三の丸の入口は、全く足も踏み込めないほどの草藪と變つて了つてゐるのを見た。

ところづくに残つてゐる石垣にも、名残なく葛がからみいつて、中には半ば崩れかけてゐるのなどもあつた。

「變つたなア」

良太はかう思ひながら歩いた。やがて自分の出入した國家老の邸址に来たが、其處は一面の梨畑に變つて、確か三百石取りの侍であつた筈の鬚の生えた男が、二三人の日傭取を相手に、せつせと働いてゐるのを見た。

やがてかれはさびしい哀れな舅の家を昔のところに見出した。家の前に、筒袖を着て、髪を櫛巻にして子供を叱つてゐる汚ない上さんを誰かと思つたら、それはお幾であつた。「まア良太さんだよ」かう言つて急いで家の中に入つて行つた。

「良太が来た」

かう言つて、老いた身は慌て、奥の方から出て来た。思ひもかけないといふ喜悅が顔にも態度にも見えて、ぶる／＼と總身が戦へてゐた。「よく来たな、よく来たな」これより他に急には言葉も出なかつた。

「まア、草鞋をお取んなすつて……」

かう云つて、一番先にお幾は盥に水を取つて来た。其處へ四歳になる末の男の兒が、青澁を垂して、手を泥だらけにして、泣きながら入つて来たが、いきなり母親の後にかじり附いた。「克巳や、お前、何だえ？ 東京からをち様が来たぢやないか。そら、御覽、泣くんぢやないよ。東京のをちさまに笑はれるよ」

かう母親に言はれて、ちろ／＼と客の方を見たが、男の兒はべそをかくのをやめなかつた。

「一番末のですね。大きくなつた」

「もうやんちやで仕方がないんですよ。」良太の足を濯いだ跡の水で泥だらけの手を洗つてやりな

がら、「ほら、おとなしくしないと、伯父様に笑はれるよ」

「子供達は？」

「皆な學校に行つてゐます。今に歸つて来ます」

「では、晝間は此子一人ですね」

「え、皆な段々大きくなりました」

こんな會話を取りかはしながら、良太は上へと上つて行つた。古い家は更に古くなつて、土臺さへ既に傾きつゝあるやうなのを良太は感じた。良太は舅と嫂とに挨拶をしてから、

「お祖母さんは？」

「さう／＼、婆さま」向うの遠くの日向の縁側に白髪頭と猫脊の後姿とを見せて、餘念なく糸車を廻してゐる老婆の方を向いて、「婆さま、良太が来た！」

かう言つたが、聞えないと見えて、矢張ブン／＼と糸車を廻してゐるので、「此頃、少し耳が遠くなつてな」と言つて、舅は立つて其方の方へ行つた。

時は過ぎ行く

三

「婆さま、聞えないのかえ？ 良太が来たって言ふのに……」

「え、良太が——」

糸車をやめた老母は矢張ぶる／＼と體を震はせた。良太が……良太が来たかえ。それはまア、何時来たんだえ？……今かえ……それはまア、ちつとも知らなかつた」

「まア、此方に来やれ」

で、老母はぶる／＼體を震はせながら、膝を叩いて立上つたが、ひたと盲ひた目の、老父に手をひかれて、其ま、靜かに歩いて、此方へと伴れられて来た。

「お祖母さん、いつも變らないで」

かう良太が言ふと、

「まア、良太が来たかえ。よく来て呉れたなア。何年逢はなかつたかなア。」

そつぽの方を向きながら、かう言つて老母は水洩をすつた。盲ひた眼からは涙がこぼれた。「それでもいつも變らないで結構ですな」

「變らないどころかな、此頃ではな、耳は遠くなるし、齒はなくなるし、それに、體が弱つて、皆な世話ばかりかけてゐるのだよ」考へて「それにしても、良太には、もう何年逢はないか、おぢいさんやお婆は行つて度々逢つてゐるけれど、私は、あの火事のあつた年から逢はないんだからな……もう七年か八年になるな」

「早いもんですね、もうさうなりますね」

人々は何から話して好いかわからなかつた。種々なことが皆なの胸を塞ぐやうにした。話が後や先になつた。

「おつるもな、飛んでもないことをして呉れて、その時はさぞ困つたらうな」かう言つた時には老母の聲は著るしく曇つた。

老父はそれでもまだしつかりしてゐた。息子の死、娘の死、その爲めに受けた打撃は歴々と體の老いに見えてゐるが、それでも嫁や孫達を控へて、自分が弱つてはといふ氣の張りが、絶えず老父の精神を引締らせるやうに見えた。老父は「それでも、奥では、皆なお變りはないかな。そ

時は過ぎ行く

三

これは結構だな。お姉様もお丈夫か」

孫娘の話の出た時には、「さうともな、お前だつて、忙しい體だから、さう度々行つて見るといふわけには行かないからな。それでもな、あのおてつはな、筆まめで、よく手紙をよこして呉れるから、彼方のことはよく分つてゐるよ。此間も一圓手紙の中に封じ込んでよこして、私に、何か好きなものでも買つて食つて呉れつて言つて来たよ。稚い時分からよく氣のつく子だつた。何でも、また出来たつて言ふことだ」

「さうですか。それはお目出度い。向うにゐても、ちつとも知りませんでした」

「まア、おてつだけは安心だ」

「さうですとも……石川さんも戦地から歸つて来てから、大變評判が好くつて、ずん／＼立身して行きなされるから、もう安心なもんです。今度は大層立派な普請をなすつたさうですね」

「さうだつてな。舅や小姑が多いから、辛からうけれど、婚がしつかりしてゐるから仕合せだ」

「本當に、良太さん、あればかりが頼りですよ」

かう傍から言つたお幾の眼には涙が溢れ出してゐた。  
言はないけれど、政十郎さへ無事で歸つて来たならばといふ思ひが、此時誰の胸にもこみ上げて來てゐた。

話はそれからそれへと容易に盡きなかつた。人々は泣いたり笑つたりした。時には、一座黙つて深い深い物思ひに耽つたりした。後には士族の零落したさまなども話頭に上つた。

「實際、變りましたね」

かう良太が言つて、來る途中に見た話をするよ、

「それどころぢやない。内に入つて見ると、それは慘めなもんだ。五百石取つたあの新十郎さんの家なんか、見てゐられないからな。何しろ、新新造が襦袢を下けて、娘がいなごを取つて町に賣りに行くつて言ふんだからな」苦々しいといふ顔をして、「時世とは言ひながら、情けないことだ」

「本當ですね」

「お前なんか、早く決心して、あそこに行つたから好かつたよ。青山の此方の家なども困つてゐるよ。何うせ寄つて行くだらうけれど、あの息子なども評判がわるくつてな。のらくらと遊んでばかりゐるといふことだ。此間もちよつと行つて見たが、家の中なんかも、随分ひどくなつてゐるぞ。惨めなもんぢやぞ」

こんなことを老父は話した。良太は何もお土産を持つて来なかつたからと言つて、五圓札を一枚紙に包んでお幾の方に出し、もう一枚の五圓の方を老父母の前に出した。

午後になると、子供達はそろそろと學校から歸つて來た。總領の實は、十五で、來年はもう學校を卒業する筈であつた。次の女の兒は、おかつと言つて、今年十三で、お下けに結つて、赤い切れなどを髪にかけてゐた。良太の前に来て、丁寧にお辭儀をしたりした。次の男の兒は十で、いやにはにかみやさんと、隅の方に行つて、じろ／＼と客の方を見てゐた。

「何うしても、これからは、商人ですね。資本があつて、勉強がさせられ、ば、それに越したことはないけれど、我々共にはさういふ眞似はしたくも出来ませんから……。私なども、詮造はも

う來年にも何處か奉公に出さうと思つてをります」

「本當に、それが一番だ」

「ですから、此方などでも、一人は商人にする方が好う御座んすよ。實は、石川さんで、世話を見て呉れるツて言ふなら、その方をさせるが好う御座んすけれど、眞弓は何處か好いところをさがして、奉公に出す方が好う御座んすよ」

など、良太はお幾に言つた。總領の學問のことについても、お幾は種々に心配した。石川は「何アに、そんなこつちやいけない。親が戦死したから、軍人にさせるのはイヤだなんて言つてるやうではいけない。進んで父親のあとつぎにするやうでなくつてはいけない」と言つたが、お幾の身にしても、何うしても實を軍人にしやうとは思はれなかつた。一度夫の身の上に味はせられた艱難を再び子供の上に見るに忍ばれなかつた。戦死者の遺兒は、士官學校に入るについても、いろ／＼な特典があるといふ話ではあつたが、お幾は何うしてもさういふ氣になれなかつた。そんな話をお幾は良太にした。

臺所に接した茶の間の壁には、西南戦争の野津少佐が軍旗を賊兵から奪ひ返すところだの、不忍池から大學の時計臺を見渡した新東京十景だのの錦繪が張られてそれがろく佗しく煤けたるた。お幾が焚きつける竈の煙は、容赦なくいつも其處まで舞つて入つて來た。

良太は其處に二夜泊つて、初めの日の夕方には、總領の男の兒と次男とを伴れて、家の裏から城を取巻いて沼の遠く見えるあたりまで行つた。昔と今では、何の關係もない沼でさへさびれて暗くなつてゐるやうに見えた。何處に行つても、笑ふ聲も聞えなければ、莞爾した元氣の好い顔も見られなかつた。行逢ふ人達は皆な黙々として、手を拱いて歩いた。

ある家の壁は落ち、ある家の屋根は草に蔽はれ、ある家の土臺は今にも倒れさうに傾いて見えた。夕の煙さへも、昔のやうに賑かには立たなかつた。

子供が連れ立つて、「明日天氣になアレ」と言つて騒いでゐる聲の中にすら、良太は零落と寂寥とを感じずにはゐられなかつた。

「何うなつて行くんだらう」

こんなことを思ひながら、良太は沼の畔まで行つた。麥の畑に沿つた路では、總領の男の兒は麥の軸を取つて口に當て、鳴らした。

歸つて來てから、良太は老父に言つた。

「何處に行つてもさびしい……」

「本當だな、昔のやうな元氣は何處にもないな」

「杉山の家ではもうゐないんですか」

「もうゐない。あの親父が奉還して、二年と経たない中にすつかり減茶々々にして了つたからな」

「さうですか。今、通つて見たら、丸で違つた人が住んでゐるやうだつたから、聲もかけずに來

ましたが……」

「あそこには在のものを買つて、つい此間引越して來たばかりだ」

「貞さんは何うしたでせう？」

「息子か。息子は親父に、とうから愛憎をつかして、去年、東京に行つた筈だがな」



「さうですか、東京に行きましたか」

夕飯の後は、皆な長火鉢の周圍に集つて、東京の話などを聞いた。汽車の話や、汽船の話、参議の金モールの話などが子供達を喜ばせた。盲ひた老母には、獨りで動いて行く車の話が何うしても飲込めなかつた。「汽車は出て行く、サイく、煙は残る。のこる煙はサイく、癩の種」など、いふ唄を良太は唄つてきかせた。

「皆な大きくなつて豪くなるんだな。父さんは、國の爲めに戦死したんだからな。父さんの名を汚さないやうに豪くなるんだ。そして、母さんや祖父さんに安心させるんだな」良太はかう言つて、總領と次男の頭を撫でたりなどした。

あくる日は、良太は自分の籍の入つてゐる家をたづねて行つた。かれは其處にも悲惨な零落した生活を發見した。養父母には殆んど愛情を持たなかつたかれも、見兼ねて、持つてゐた金をいくらか置いて來た。かれはかういふ人達に比べて、自分などは早く決心して好かつたと思つた。良太は歸つてからの茶樹栽培の方法などを考へながら、家の方へ戻つて來た。

別れて來る日は、今更のやうに名残が惜まれた。盲ひた老母は「今度はどういつ逢はれるか。とても、この世では逢はれないかも知れない」などと言つて泣いた。お幾の眼からも涙が流れた。良太にしても、年寄と寡婦と孤兒とを、この古い家に残して歸るには忍びないやうな氣がした。「では、眞弓さんの方は、好いところがあつたら奉公に出すやうに旦那さまにも頼んで置きますから。……さうした方が結局後のためですから」と返すくも良太はお幾に言つた。

大手を町の方に出る時、「この次來る時には何んなになつてゐるだらう。その時は、士族屋敷などといふ跡も形もなくなつて了つてゐるだらう」かう思ひながら、良太は川舟の出る舟着の方へと急いだ。かれは來る時と同じやうに矢張草鞋を穿いてゐた。その舟着までは、町から一里以上も歩かなければならなかつた。

## 十三

實を迎へた翌年の春に、良太の家では、また老父が眞弓を送つて来るのを迎へた。

眞弓はかぞへ年十一だが、本當にすると、まだ九年何ヶ月であつた。かねて頼んで置いた堅い丁稚奉公の口が旦那の方にあつて、忽ち話が纏つて、何時伴れて來ても好いとなつた。それは旦那の知人の別懇な士旅から轉業した本屋で、店は京橋の賑かな大通にあつた。良太は、眞弓が到着すると、二夜泊らせて、やがて老父の手から稚い少年を離して、旦那の知人だと言ふある役所の屬官の家を麴町の山王の下のとこに訪ねた。そして其處からは、眞弓はその世話をして呉れた屬官に伴れられて、大通の本屋の店に行つた。

良太の總領の息子の詮造は、その時、既に十五になつてゐた。實とは一つ違ひの年下ではあるが、體が大きく、悪戯で、父母の言ふことなどは素直にきいて居なかつた。それと言ふのも、父親が甘やかして育てたのと、近所の遊び仲間には百姓や町人の子が多かつたからで、それまでに二度も奉公にやつたけれど、いつも二月も居られないで出て來た。眞弓が田舎から來た時にも、二度家に歸つてゐて、おとなしい眞弓を誘ひ出して、上水端に行つて、凧などを揚げた。

それに引かへて、娘のお初は十一になつたばかりで、おとなしい、やさしい色の白い女の兒であつた。いつも學校から歸つて來ると、おやつを貰つて、二階に行つて、お手玉を取つたり、猫を相手に遊んでゐたりした。猫は玉ヤ玉ヤと呼ばれて、いつも喜んでその女の兒の膝の上に行つた。「詮造はおかねの氣象を受けついでだが、お初坊は良太だ。良太そつくりだ」などと、姉刀自はいつも笑ひながら言つた。

眞弓が京橋の方に伴れられて行つた翌々日は、丁度日曜日で、日和下駄を鳴して、袴を裾短かに穿いて實がその下宿してゐる本郷の塾の方からやつて來た。手紙が來たので、わざ／＼祖父に逢ひに來たのであつた。「さう、もう眞弓は行つちやつたの？」かう言つて、實は弟に逢へなかつたのを惜んだ。

實は去年の秋に上京した。學問の方針については、軍人には何うしてもしたくないといふ母親の意見があるので、石川と一緒に種々に迷つたが、兎に角漢學は修めなければならぬと言つてそれで取敢へず今の塾に入る事になつた。塾費と食費とは、すべて石川が出す事になつた。

進んだ頭脳を持った人達は、これから先の學問は、外國語と數學とでなければ駄目だとは思つてゐたが、一般ではまだ漢學が一番に重んぜられてゐた。「うそを書くやうな奴は駄目だ」人を使ふにしても先づ第一にその人の漢學の素養の有無を標準にした。従つてさういふ子弟を教育する漢學の塾は東京の到るところにあつた。實の就いて學んだ先生は、元、昌平黌の助教で、漢文も漢詩も旨く、それに、唐宋八家文の無點の素讀が上手であつた。學風は嚴格な保守主義者で、塾生でたまさか外國語などを習ふものがあると、夷狄の奴輩だと言つて、すぐそれを放逐した。日記は起し簿と言つて、すべて漢文で書かせた。

塾生は四五十人もあつた。

實は半年と経たない中に、すつかりその塾の風習に感染して了つた。慷慨悲憤の歌などの流行する時代で、その頃の書生は大抵袴を裾短かに穿いて、髪を長く延して、犬殺の持つやうな太いステツキを振舞して、雲井龍雄の詩などを聲高々と朗吟して市中を闊歩した。脂粉の氣に觸れることを殊に嫌つた。

日曜日には、實は別に行くところもないので、石川に行くか、でなければ良太の許を訪れて行つた。しかし石川には、姉はゐるが、張りつめた三味線の糸のやうな氣分で、いつも手痛い戒飭を加へられるのが辛かつた。それよりは遠いけれども、良太の家の方が好いと思つた。おかねのちやほやして呉れるのも嬉しいし、お初に兄さんと慕はれるのもなつかしかつた。實はいつもお初に算術だの本だのを教へてやつた。

實がやつて行くと、お初は、

「兄さんが来た、實さんが来た」

かう言つて喜んで出て来た。

それに、實は奥の人達からも可愛がられた。「好い氣分の兒だよ。それに、氣立がやさしいよ。政十郎に似たと見える」から奥方は旦那に話した。姉刀自は、袴を穿いて活潑に入つて來るところを見て、「本當に、實は好い書生さんになつたね。早いもんだね。小さくつてゐるのは、まだ此間だつたのに……」などと言つた。誰も相手にして呉れない時には、實はひとり、廣い邸やら

庭やら林の中やらを歩いた。

その癖、詮造とは餘り仲が好くはなかつた。昔もさうであつたが、「犬と猿のやうだね、一緒にゐるさへすれば喧嘩する」とよく言はれたものだが、今でも詮造のゐるところに出會すと、實は機嫌のわるい顔をして黙つて坐つてゐた。しかし家に歸つて來てゐる時でも、詮造は、落着いて其處に坐つてなどはゐなかつた。大抵近所の友達の許に遊びに行つてゐた。

實の評判の好いの引かへて、「詮造には困る、困る」と奥の人達からも言はれた。

行つた先からは、眞弓の噂がをり／＼傳はつて來た。「年が行かないから、可哀相だ」とこの間も、雪の降る日に中番頭と一緒に小石川まで本を背負つて行つたが、途中で歩けなくなつて、歸りは俥で送られたとよ。まだ、九年何ヶ月ちやそれも無理はないが、まだ、ちつと早すぎたな。もう一年待てばよかつた」かう旦那はある時、何處からかきいて來て話した。しかし、さういふ話のあつたのも始めの中で、此頃では大分馴れて、上さんに氣に入つて、眞弓では呼びにくいから、弓藏と名を改めたことなどが語り傳へられた。ある日、ある人の葬式から旦那が歸つて來た時に

は、「今日は眞弓に逢つたよ。主人の供をして來てたよ。可愛い小僧さんになつた。莞爾してゐたよ」などと旦那は話した。

「心配したこともなかつた」かう言つて良太夫婦は始めて安心した。

年中無沙汰をしてゐるからと言つて、良太は年始だけには、いつもきまつてわざ／＼牛込の石川の宅を訪ねた。戦争後、石川の立身したのは評判であつたが、新しく出來た普請を見ると、一層それが確められた。新建の棟の高い二階屋は、低い茅葺や瓦屋根の上に高く群を抜いてゐた。二階の欄干からは、遠く富士の白雪が見渡された。

良太は座蒲團を勧められても、滅多にそれを布いたことのないやうな人であつた。酒は好まぬから無論のこと、食事時分に氣をきかして先で何か取つて呉れても、遠慮して容易に箸をつけなかつた。石川に行つた時などには、殊にそれが甚しかつた。「まあ、角筈のをちさん、折角注文したんですから、今、参りますから」かう言つて、袂を取らぬばかりにしておてつが留めても、良太はいつも遠慮して歸つて來た。

時は過ぎ行く

二六

「そんなに留められたら、御馳走になつて來れば好いの……先だつて、貴方のやうにされらや氣持が好くない」

こんなことをおかねが言ふと、

「女はそれでもすむが、男には出來ない」

かう良太は言つた。

良太はおてつの子の二番目の男の兒の大きくなつたことなどを話した。「可愛い子だ……それに、今度は男の子だから、石川さん、可愛くつて仕方がないんだね。抱いて連れて來たり何かした。……それにおかつが田舎から出て來るつてね、田舎で、年寄とお袋の傍に置いて仕方がないから小間使代りに東京に連れて來て、世話をするつておてつが言つてゐたよ。何でも、久しく田舎に行かないから、もう少し暖かになつたら、一度國に行つて、さうして一緒に連れて來るつて……」

「それでも、あの子は、よく田舎の面倒を見て呉れるね」

「本當だ。感心なもんだ。さういふ心掛けだから、運が向いたんだ」かう良太はおてつを賞めた。

#### 十四

昨年の盆にも、今年の正月にも、主人から出た新しい仕着せを着て、可愛い丁稚姿で眞弓はやつて來たが、良太夫婦は、別にこれと言つて、變つたことをも耳にしなかつた。眞弓は大勢の番頭やら上さんやらから小遣を貰つて、澤山金を財布に待つてゐた。それにおかねも、小遣を、二三十錢やつた。眞弓は半年の中に、すつかり人馴れがして、使に行つたり物を買ひに行つたりすること何とも思はないやうな兒になつてゐた。正月に來た時には、丁度その日が日曜日で、其處に來てゐた兄の實と一緒に、近くの町にある閻魔に行つて、終日面白さうにして遊んで、夕方になつてから兄に送られて機嫌よく歸つて行つた。

寢小便の癖があつて、上さんに叱られて、裸體にされて灸を据ゑられたといふ噂も、此頃ではもう聞かなくなつて居た。

時は過ぎ行く

二七

ところが、三月の朔かなある日の夕暮に、真弓はひよつこり、その小さな姿を良太の家の扉のところに見はした。丁度その時、田舎から出て来たおかつが来て来た。おまア、真弓ぢやないか、何うして来たの」と言つて眼を睜つた。

真弓は主人から旦那に宛てた一通の手紙を懐ろにしてゐた。真弓も唯簡單に旦那のもとに使によこされたこと、のみ思つてゐた。「お前、これを持つて、角筈まで行つてお出で」かう主人に命ぜられて、寧ろ喜び勇んで、長い夕日の路を歩いて来た。

旦那は其時役所からまだ歸つて来てゐなかつたが、やがて俵の輾る音がして「お歸り」と言ふ聲がきこえたが、暫くすると、自分の持つて来た手紙は、實は自分のことに關してゐたといふことを真弓は小さい心に知つた。伯父はさうでもなかつたが、伯母の権幕は俄かに變つた。

「真弓は一體、何をしたんだ。人の物を取るなんて、そんなことをしたのかえ？ 錢を取つたり、行先のかけをこまかしたりして、それで奉公がつとまると思つてゐるのかえ？ お前は武士の子ぢやないか。お父さんは、國の爲めに戦死までした立派な人ぢやないか。それなのに、大それた、

人のお錢を取るなんて何うしてそんな了簡になつたんだえ？ お錢が欲しけりや、伯母さんなり伯父さんなりに言へば、いくらでもやるぢやないか。おい、これ、何うしたんだ。黙つてゐちやわからないよ」おかねは恐ろしい権幕で真弓をこづき廻した。

真弓は唯低頭してゐた。そしてをり／＼少年期に起るやうな不良なわるごすい眼色をして、ちよい／＼伯母の方を窺み見た。「田舎の祖父さんや母さんが聞いたら、何と言ふだらう。牛込の姉さんが聞いたら、何と言つて怒るだらう。そんなさもしい了簡の奴は、岡田家にはゐなかつた筈だ。親の顔に泥を塗るとはお前のことだ。これ、真弓、お前、本當に、人のお錢なんか取つたのかえ？」苦々しいといふ顔の表情をして「お言ひな、申開きが出来たら申開きをおしな。伯母さんや伯父さんは、旦那や奥方の前で、どんなに恥かしい思ひをしたか知れないよ」

「まア、好いから、緩くり言つてきかせてもわかるから、何しろ、まだ子供なんだから」見兼ねてかう傍から良太が言ふと、

「お前さんは、黙つてお出でなさいよ、子供だつて何だつて、そんなことをさせて黙つてはおけ

ませんよ。三つ子の魂百までもと言ふぢやないか。本當にあきれたもんだ。評判も好いし、寢小便もしなくなつたつて言ふし、世話甲斐があつた、何うか立派な商人になつて、祖父さんや母さんに樂をさせるやうにと思つて喜んでゐたのに……呆れた子だ」おかねの眼からは涙が流れた。「實なんか、何うだえ？ 親の爲め、家の爲めを思へばこそ、朝は早く起き、夜はおそく寝て一生懸命に勉強してゐるぢやないか。此間も、頭髪を刈るお錢もないツて言つて、茫々した髪をしてやつて来たぢやないか。母さんに心配させてはと思つて、着物が汚れても、それで間に合はせてゐるぢやないか。それなのに、お前は……お前は……。お前のやうなのは、兄弟に對して面目ないぢやないか」

「まア、好いツて言ふに……」

黙つて見てゐれば、打擲にも及びかねまじき權幕なのに「まア、さうお前のやうにがみく言つたつて仕方がない。少し靜かに落着かせて考へさせる方が好い」かう言つて、良太は無理やりに、眞弓を二階の方へ伴れて行つた。

二階では、お初とおかつが遊んでゐた。俄かに伯母の權幕の變つたのを見て、それと事情を察した姉は小さく、なつてゐる眞弓の傍に寄つて「お前、本當に、そんなことをしたのかえ？ え？ え？」などと言つて訊いた。眞弓も悲しくなつて泣き出した。

主人から旦那に寄した手紙は、しかし解雇するといふ意味ではなかつた。これでは、將來困るから、直るものならば直したい。子供のことはあるし、誘惑の多い都會のことはあるから、無理はないのだから、餘り折檻などはせずに、二三日留置いて、よく戒めて貰ひたいといふ道理のわかつた手紙であつた。で、眞弓は二三日を其處で過した。

其間に、眞弓の小さな姿は、熊の皮の布いた旦那の書齋に呼寄せられて、長い間戒められたり、奥方の前に坐らせられて、懇々かんで含めるやうな教訓を與へられたりした。姉刀自は、「本當に、眞弓ちゃん、人の物を取るといふことは、一番わるいんだから、それが積ると、おまはりさんにわたされて牢舎に入れられて了ふんだから、今度からは、決してそんなことをしてはいけませんよ」などと言つた。

兄の實が来て、更に懇々説諭して、將來は決してさういうことはしないといふ訖證文のやうなものを半紙に書かせて、その名のところに、掌に墨を一杯に塗つて、ぴたりと捺させた。

眞弓の小さい心は、しかし田舎の母親の方に引かれて行つてゐた。邸の中の竹籬に大きな笥が生えてゐたり、緑葉の中に花が見事に咲いてゐたりするのを見ると、かれの心はいつも遠い田舎の方へと飛んで行つてゐた。店に歸つて行つて主人や上さんや番頭の顔を見るのが辛かつた。

しかしさうは出来なかつた。ある日、實は眞弓を伴つて、町の大通の方にあるその店へと行つた。實は流石に稚い弟に辛らくは當らなかつた。かれはあるかないかの財布の底を叩いて、弟にある蕎麥屋を箸つた。そして「本當に、今度は心を改めるんだよ。い、かえ」など、言つた。やがて髪を長く、袴を穿いて大きなステッキを持つた兄と、裃纏を着て淺黄の股引を着物の下に見せた弟とは、並んでその大きな店へと入つて行つた。

月日はまた經つて行つた。其時分、奥では養子と養女を貰ふ話が進行して行つてゐた。養子は遠い親類に當る今年二十五の青年であつた。ある役所に勤めてゐた。

「養子と言つたつて、あれに、この跡をつがせるのではない。いくらか分けてやつて、別居させればそれで好い。お前はお前で、あのお光を貰つて、成長くなつたら、別に養子でも何でもすれば好いぢやないか」

かう旦那は奥方に言つた。

お光と言ふのは、奥方の姪で、今年八歳になつてゐた。綺麗な色の白い子で、これまでには度々奥へやつて來てゐた。

良太の家にも、詮造のことについて、困つたことが出來た。三度目に行つた店を出されて來た時、餘りやかましくおかねが小言を言つたので、それに腹を立てたのか、詮造は、そのあくる日、其處等にある金をさらつて、そして家出をした。

驚いて、彼方此方をさがしたが、當分はその行方がわからなかつた。

「本當に、困つた奴だ」

「それと言ふのも、貴方があまり甘やかして育てたからです。貴方は、子供を可愛がつてばかり



あるから、それで我儘にばかりなつて了ふんです」

「そんなことを言つたつて仕方がない」

「あ、あ、もうつくづく厭だ、子供は。子供のために心配するなら、いつそ子供を持たない方が好い」

おかねはこんなことを言つた。

ところが、ある日、宮内省の馬車が揃つて街道を通つた時に、御者になつて、得意な顔をして詮造が驅けて行つてゐたのを見た人があつた。その人はそれを良太の許へと知らせて來た。

探つて見ると、詮造は、果して、何處を何う頼んで、さういふところに入り込んだか、いつか立派な御者になつて、頭をきざに分けて、シガアを燻らしてゐるといふことがわかつた。

「呆れた奴だ！」

かう良太もおかねも言つたが、勝手に出て行つて、勝手にさういふ真似をしてゐるのをやめさせる譯にも行かなかつた。仕方がないので、そのまゝ、放つて置くことにした。

「でも、詮造は一人でさういふ食ふ道をさがすんだから豪い」

などと言つて旦那は笑つた。

その年の秋のある日に、實は真弓とおかつとを伴れて、田舎の方へへ行つた。一度店に歸つたけれど、真弓のわるい癖は改められなかつた。もう一度他の店へでも奉公に出して見ようかと人々は思つたけれど、なまなか、東京になど出すからわるいのだ。物心もつかない中に、誘惑の多い都會に一人を出して置いては、當人のためにもよくない。いつそ田舎へ歸して、學校に入れて素直に育てる方が好い。かういふ説が勝を制して、それで伴れて歸すことになつたのであつた。

お勝も矢張さうであつた。田舎を出る時には、石川にも兄弟が澤山あるから、ひよつとしたら其方に貰はれて行くやうなことがないとも限らない。さうすれば、姉も仕合なれば妹も好い。こんな風に思つて母親は出してやつたのであつたが、來て見ると、勝氣のお勝は、姉に世話を焼かせるばかりで、小間使の役にも立たないやうなことが多かつた。「何うしてあゝ素直でないだらう。人の言ふことを用ひないのだから困る。私なんか、岡村さんに奉公してゐる時は、あんなもんで

はなかつた」など、おてつは思つた。自分の肉身の妹といふこともつかひにくかつた。おてつは母親の肩荷が下りるためにと思つて、妹の世話をする氣になつたのだが、さて伴れて来て置いて見ると、却つて自分の心勞が殖えた。で、お勝も一緒に國の方へ歸ることになつた。

十五

良太の經營した茶樹栽培は、年を経るに従つて、益々成功した。

良太は梅の木の下から、林の縁までも茶樹を栽ゑることに盡力した。此頃では、昔の荒れた邸とは何うしても思はれぬほど四邊が整頓した。柿の木、柚の木、葡萄の蔓、栗、さういふものも繁茂した。

ことに、初夏の候の茶の芽の繁茂は見事なものであつた。白い手拭や赤い襷が其處此處に見えて、近所の娘達や上さん達が相對して、ざるをか、へて、茶を摘んでゐるさまは、丸で繪のやう

であつた。夜の雨の晴れた朝などには、ざるの目が出ると言つて、葉の乾かない中を目蒐けて女達は早くからやつて来た。茶摘唄がのどかに聞えた。

さういふ時には、廣い臺所の入口に、筵を廣く敷いて、小さな權衡と大きなはかりとを置いて持つて来る女達のざるを目方にかけて、風袋をさし引いて、あとの目方を銘々の帳面につけてやつた。一杯茶の芽で埋められた筵の傍では、良太はそれを買ひに来る商人と應對した。

「何うも芽がよくありませんな。肥料が足りないからですな」

かう商人が言ふと、

「そんなことはない。肥料は十分に入つてゐる筈だが」かう言つて、良太は一摘みつまんで齒で噛んで見たりした。買手は彼方此方から来た。四谷の方の製茶業者などからもやつて来た。

夕方は、摘子に賃金を拂ふので忙しかつた。女達は晝間書いて置いて貰つた帳面を出して、それを現金に引替へて貰つた。大きな財布に小錢をちやらつかせながら、一人々々金を渡してやつてゐる良太の姿は薄暗くなるまで其處に見えてゐた。

奥に用事のない時には、私も小遣にするんだなどと言つて、おかねも女達に交つて茶を摘んだ。田舎にゐる時分から経験があるので、おかねは多く摘むことについては、他の女達に譲らなかつた。今日は私が一番多く摘んだなどとおかねは言つてゐた。

二三年はかうして唯、芽で賣つて来たが、良太、芽で賣つちや損だな。一つ火爐を拵へて、内でもやつて見ようかな。後には旦那がかう言ひ出して、奥の空地に、掘立小屋のやうなものを長く拵へて、そこに五つほど火爐を作つた。

大勢職人が入るやうになつてからは、あたりは、目のさめるやうな活動を見せて来た。今までしんとしてゐた邸の中は、俄かに賑やかになつて、奥では、朝は茶師の唄で目をさますやうになつた。従つて、賄の方の人手も必要になつて、多くの女中が入り込んで来た。

茶師が半ば裸になつて、せつせと並んで茶を揉んでゐる前で、面白さうにして旦那が見てゐることもあれば、姉刀自が其頃はもう養女になつて来てゐる綺麗なお下けのお光と一緒に笑ひ興じて立つて見てゐたりした。お光一人きりの時には、「お嬢さん、此方へ入らつしやい、好いものを

あける」などと言つて、茶師は揉んだ茶の塊を投げるやうにして見せた。

茶師の仲間などには、放浪の生活を送つて来たやうなものが多かつた。かれ等は終日労働して、夜になると、いつも鼻唄をうたひながら、手拭を肩にかけて、新宿の方へと出かけた行つた。中でも、上手な、仕上げをするやうな職人は、怠けたり苦情を持出したりした。新宿に行つては、よく流連をして、馬をつれて来て良太を困らせた。

それに、茶師はよく女中などと通じた。ある女中は、來るとすぐ、仕方けの職人と出来て出奔した。

「何うも風儀がわるくつて困るな」

かう旦那も考へるやうにして言つたが、最初の年の結果が、芽で賣るよりも數倍利潤があつたので、あくる年もそれをやめるわけには行かなかつた。良太は忙しいのに困つてゐた。

そしてその時節になると、いつも旦那が歴史や漢學の本を讀んでゐる書齋にまで茶の壺がいくつとなく並べられた。

十六

「良太さん、困つたことが出来た」

ある日、向う村の芝留がやつて来て言つた。

「何うしましたね」

「いや、もう困つちやつた」

「何うして？」

「何うしても、何にも……。息子が飛んでもないものに引懸つて……」

「定さんが？」

「え、此間から變だ、變だと思つてゐるが、たうとう引懸けられちやつた。お袋がわるだから困る」

さう言へば、此間から定といふ芝留の總領息子が、常盤津を習ふのだとか何とか言つて、近頃其處に引越して来た常磐津の師匠の許に足繁く出入してゐた。それは四十五六のお袋に二十位の娘二人きりで、お袋も娘も一緒に三味線を近所の子供達に教へてゐた。は、ア、こんなところ、に三味線の師匠が引越して来たな。始めは良太は唯かう思つて通りすぎたが、一月と経たない中に、この近所の若者が澤山に其處に集つて来て、毎晩おそくまで三味線を弾いたり唄をうたつたりしてゐるのを良太は見た。つい此間も、おかねにその話をするとう段々ひらけて、碌なものが入つて来ない。あのお袋は、もと深川で藝者をしたんだとき。あの娘も、何でも、その藝者をしてゐた時に出来た子だとか何とか言つてたよ。どうせ、碌なものもない」とおかねは言つてゐた。ある夜には、暗い通りに、其處の障子だけ明るくかゝやいて、娘が村の若者と一緒に三味線を弾いてゐる姿がはつきりと映つて見えてゐた。

「それは困つた」

「今日向うから人が来てな、あの娘が懐妊してゐるが、それは定の子だつて言ふんだ。何んだか

わかりやしねえけれど、まア、さう言ふんだ。それから、定にきいて見ると、さうだつて言ふぢやありませんか。それも、そればかりならまだ好いけども、何うしても女房にする。貰つて呉れつて言ふんですがな。困りまりましたのさ」

「それは困つたな」

「若い者には本當に困る。相應なものならな、何うせ一人貰はなけりやならないんだから、貰つてやつても好いけれども、親も素性もわからないもの、娘を、わしが家に入れるわけには行きませんしな。それに、さういふものを入れては、行末のためにもなりませんからな」

「さうですとも……」

かう言つたが、「それにしても定さんは幾つになりますか？」

「二十三です」

「もう、さうなりますかね」

良太の身にしては、来た時は、まだ十二か十三で、汚い筒袖などを着て、上水端に来てよく厭

をあけてゐた。銚造などを子分にして、わるい悪戯を教へて困つた。それがもう女を拵へるとは……。良太は不思議なやうな気がした。

「何うも、出来たものは仕方がない。金でも少しつかませるより他に、仕方がないでせうな」

「ところが、向うも中々かしく出て来てゐる。こんな身分ですけども、金を目的にしてゐるのではない。そちらで貰つて下さらなければ、此方で養子に戴いても好いつて言ふんですがね。困りましたのさ」

「定さんは何ういふんです」

「定の野郎は、もうしようがないんです！ すつかり氣が其方に行つてゐるんだから、少し難かしいことを言ふと、すぐ向うに行つて了ふんだからね。盲く騙されちやつたですな」

「若い者はそれだから困るね」

「本當ですよ」

芝留はかう言つて腕組をして考へたが、「何うしたもんでせうな、良太さん」

「まア」

良太は返事に困つた。暫くしてから、「まア、そのまゝ、そつとして置きなさいよ。餘り喧しく言つたつて仕方がない。若い者同志のことだから、餘り喧しく言つてひよんなことでも出来ると、それこそ取かへしがつかないから……。まア、貴方の家では、嫁に貰ふことも出来ない。養子にやることも出来ない。さう言つてきめておいて成行を見るより他に仕方がありませんな。餘り若い者を困らせるのも可哀相だが、ちつとは苦勞させるのも樂になりますよ。金のことなんか、餘り此方から持ち出さぬ方が好い。何うしても、離れないと言ふなら、一二年、捨てた氣で見えてお出でなさいよ。さうして見た上で、好い嫁なら、何も常磐津の師匠の娘でも何でも構はないぢやありませんか、家に入れたつて……」

「何うもな、それがな」

「出来なけれや、それも仕方がないが……」かう言つて、良太は考へて、「まア、成行を見るより他仕方がありませんな」

「ぢや、まアさうしすかな」かう言つて、芝留は其日は悄氣で歸つて行つた。

良太は其後種々なことを耳にした。中に入つた男が芝留の家に上り込んで、金を握らずには何うしても動かなかつたといふことや、息子の定が父親に追かけられて、新町通を遁けて歩いたことや、常磐津の師匠が彼方此方に行つて芝留のわる口を言ふことや、さういふことは絶えず彼方此方から噂になつて聞えて來た。時には息子の定が常磐津の師匠の家來てゐるのを良太は見懸けたりなどした。

「好い娘ツ子だ」

おかねはある日こんなことを言つた。

「お前、見たかえ？」

「成ほど、お腹が大きいよ。五月か六月だよ」

「でも、本當に、定公の胤とわかつてゐるのかしら？」

「それは、何うだか……この間中、大勢若い衆が來てたからね」かう言つておかねは笑つて、「そ時は過ぎ行く」

れに、あそこでも困るつていふ話だよ。あの娘がさうときまつてから、三味線を習ひに行くものはなくなつたつて言ふからね」

「それは、さうだらうな」

それまでは別に氣に留めてもゐなかつたから、逢つても知らずに行過ぎたが、ある日、良太は其處から出て通りの方へ歩いて行く小柄の色の白い娘を見た、銘仙の派手な着物を着て、髪を島田に結つて、赤い鹿の子の布などをかけてゐた。「は、ア、あの娘だな」かう思つて良太はその後姿を見送つた。

一月ほどしてから、水車場で、良太はまた芝留に逢つた。

「何うも、仕方がねえ、良太さんの言ふ通りにしやした」

「家に寄りつかねいかね？」

「もう仕方がねえ。勘當した氣で、長い目で見てゐやすよ」

「まア、さうするより他には——」

でも、野郎、困つてるにや困つてゐる。野郎が食はせなけりや、今ぢや稼ぎ人つてねんだもの。べこべこ弾きに来る奴も、もうゐやしねえからな」

良太は言つた。「まア、心配しないで御出でなさいよ。陰ながら、私が見てやるから……。お前さんが出ちや面倒だが、私なら、差支ないから……。心配しないで、見てお出でなさいよ。二三年すりや、何うせ元の巢へ歸つて行くから」

「難有う、……何分よろしく」かう言つて芝留はいろくくと息子のことを良太に頼んだ。

それから良太は陰になり日向になりして、息子の定の面倒を見てやるやうにした。それから一月経つた頃には、良太の姿はをりく常磐津の師匠の家の中に見えた。良太は邸にある仕事を息子に宛がつて、僅かながらも、その日々の賃金を得させるやうにした。

息子の定の姿は、土方人足の中に交つて鋤、鍬を手にしてゐたり、良太と一緒に垣根に青竹を當て、ゐたり、邸の裏のところ、大きな樹の枝を薪に割つて、それを小さくいくつにも東ねたりしてゐた。夜は定は狭い臺所で遅くまで繩をなつた。

おかねが行つて見ると、息子が働いてゐる傍に母親も娘も出て来て、種々と禮を述べた。「本當の親さへふり向いても見て呉れないのに、青山さんには本當にお世話になつて、この御恩は一生忘れることでは御座いませぬ」など、母親は言つた。「奥のおかみさん、奥のをばさん」と言つて娘はおかねを慕つた。

「本當に、先方のわからずやにも呆れて了ひますよ。息子がかうやつて、苦勞して、働いてゐても、ちつとも可哀相とも何とも思つて呉れないんですから……。何ぞと言ふと、金を取られるとばかり思つてゐるんですから。ねえ、お上さん、出来たものは仕方がないぢやありませんか。ぐづく言つたつて、取かへしがつくもんぢやありませんか。向うの息子も大事なら、こつちの娘だつて大事なのは同じことですよ。何も、すきこのんで、私が何う斯うさせたと言ふ譯ぢやなし——」聞いてゐれば、容易に盡きない、流る、やうな辯で、母親はいつもおかねに話しかけた。

「矢張、お侍さんでなくつちや駄目だ、土百姓は何時まで經つても土百姓だ」とこんなことをも母

親は言つた。

良太夫婦は、何ぞと言つては、不足勝なものを其處へ持つて行つてやつた。五目鮎など出来ると、重箱に詰めて、それをお初に持つて行かせたりした。後には、お初も段々その母親と娘とに親しくなつて、「お初ちゃん、三味線を教へて上げませうね」かう言つて、娘は長押から三味線を取つて、鑰金の袋を外して、鬘、髻をつめて赤い片などを頭にかけたお初を其處に坐らせて、常磐津の初の方を教へた。

「お初ちゃん、本當に糸の筋道が好い。少し習ふと、ぢき上手になりますよ」かう娘はおかねに言つた。

おかねにしては、三味線なんか教はつたつて仕方がない。碌なことを覚えやしない。かうも思ふのではあつたが、さうかと言つて、折角の彼方の好意を無にするにも忍びなかつた。それに、お初は、三味線が好きで、學校から歸つて來ると、道具を其處へ投り出して置いて、いつも一番先に娘の許へと駆け出して行つた。



良太にしても、師匠親子の生活に入つて行つて見ると、唯わるだくみがあつて、芝留の息子を誘拐したばかりは思はれなかつた。そこには矢張それだけの理由があり、道筋があつた。それに、息子の定が、女の爲めに、またはまだ生れない子のために、何不足のない家に育ちながら、貧乏人のやうに、せつせと働いてゐるのも同情された。

「おとなしい娘には、娘だけでも……」

かうおかねが言ふと、

「それはさうだけでも……芝留さんになつても、ちよつと、あれを内に入れるには、困るんだよ。もつと開けてゐると好いんだけど、中々あれで頑固だからな」

「定さんだつて可哀相だ」

「でも、まア、仕方がないよ。まア、好きな暮しをしてゐるやうなもんだから。兎に角、娘が身二つにならなけりや仕方がない」

「定さんだつて、今ぢや、考へてゐるだらうね」

「少しは考へてゐるだらうけど……この間も、そんな話をしたから、親達を恨んではいけない。親は心配してゐるんだからつてよく言つてきかせて置いた。そこは、定さんだつてわかつてゐるよ。私が一番わるいんですからつて言つてゐたよ」

「何うも、しようがないね」

「お互に運がわるいんだと思つて、あきらめるより他に仕方がない。その中、何うにかなるよ」

「もう、ぢきですな、生れるのは——」

「來月かえ？」

「さうらしいよ」

交情がよくつても、時には息子と娘と母親と三人して言ひ合をして、互に高い聲を立て、ゐることなどもあつた。ある日、それを止めに、良太が入つて行つた時には、息子の定も娘も涙を流してゐた。「をぢさんきいて下さい。私だつて、これほど思つて働いてゐるんですから、さう言はれては立つ瀬がありませんから」かう言つて定は涙を平手で拭いた。母親は母親で、「何もこん

なところにもまご／＼してゐなくつたつて好いんだよ。お前さへしつかりしてゐて呉れ、ば、初めから、こんなことにやなりやしないんだよ。馬鹿々々しい。お女郎にでも何でもなつて、母さん一人位立てすこすのがお前の役目だよ。こんなところにいつまでぐ／＼してたつてしようがあらやしない」かう言つて、傍で泣いてゐる娘に喰つて懸つた。娘は隅の方で小さくなつて歎歎けてゐた。

いよ／＼産氣が萌して、もう生れるのもほどがないといふ夜には、おかねはかねて頼んで置いた産婆よりも早く出かけて行つて、何彼と世話をした。二間しかない狭い家では、別に産をするところをきめておくことなどは出来なかつた。定は良太の家から、二枚折の古い屏風を借りて来て、それを産婦の枕元に立て廻した。

定は蒼白い娘の顔ををり／＼心配さうに覗きに行つた。

しかし、産は思つたほど重くはなかつた。婆さんがやつて来て、定とおかねとが湯をわかしたり何かしてゐる中に、生れた赤兒は、さ、やかな泣聲を立てた。

「男かえ？」

かう一番先に母親が訊いた。

「お嬢ちやん」

「女かえ？」「女ぢやつまらない」といふ顔を母親はした。男でもあれば、それを縁に、また何んな運が向いて来ないとも限らないのにといふ腹が母親にはあつた。

「好い子だよ、色が白い。母さん似だ」其處に行つて見たおかねは、かう言つて、臺所に立つてゐる定の方を見た。定は嬉しさうな顔をしてやがて此方へやつて来た。後産が下りて了つた後は産婦はぐるぐる巻の髪と蠟のやうに白い襟首とを此方に見せて、靜かにすやく／＼と眠つて行つた。三分の釣ランプが薄暗くあたりを照した。

あくる朝、早く目覺めたお初は「生れたの？ 女？ うれしい」かう言つて、何をもちし措いて逸早く師匠の家へと走つて行つた。そして、挨拶もせず、いきなり産婦の枕元へと上つて行つた。

お初は娘の傍に色の白い髪の毛の濃い可愛い赤兒の静かに寝かされてるのを見た。「お初ちゃん、来たの？ よく見て下さい」かう言つて娘は莞爾笑つて見せた。

「負はせて下さいね。ね、ね、大きくなつたらね」お初は妹でも出来たやうに喜んだ。

十七

おてつが二番目の男の兒を生んでから、體が際立つてわるくなつてるといふことを良太もおかねも耳にした。「何うしたんだらうね。餘り氣苦勞をしたからだよ。お勝のことで心配したり、眞弓のことで心配したりしたからだよ。おてつは、本當に大抵ぢやない。舅のことから、家のことから兄弟のことまで一人で心配しなけりやならないんだから」  
實が日曜にやつて來ると「何うしたえ？ 牛込へ寄つて來たかえ？」  
かういつもおかねは聞いた。

「どつと寝てるるんぢやないだらう？ 一體、何んな風なんだえ？ 醫師にかつてるるのかえ？」

忙しい中を、半日の暇を貰つて、おかねが見舞に行つて歸つて來た時には、心配の色がありありとその顔に見えてゐた。「困つたもんだねえ、何うも勞症らしいつて言ふんだよ。別に變つたことはない。矢張、起きて立働いてはるるんだがね。いくらか瘦せたよ」

「醫師は？」

「近所にある醫師にかつてるるんださうだけれど、何うも本當のことがわからないらしいから、この次の日曜に、一緒に伊東さんへ見て貰ひに伴れて行くつて石川さんが言つてたよ。あ、丁度私が行つてると、早退か何かで歸つて來てね。石川さんも心配してるよ。それに、おてつはまア、よせば好いのに、あの氣性なもんだから、舅の世話をしたり、小舅の面倒を見てやつたりしてゐるんだもの。病人だから、靜かに落着いて寝てゐれば好いのに、それも出来ないんだよ、あの子には——」

「困つたもんだな」

良太はかう言つて嗟嘆した。やがて、

「それで血でも出るのかえ？」

「少し出るやうなことを言つてたよ。たんとぢやないけども、昨日も出たなんて言つてゐたつ  
け……。それにね、そんなことを田舎に言つてやると、何んなに心配するかわからないから、餘  
り言つてやらないで下さいといつて言つてゐたつ。本當に、苦勞性だからね、あの子は——」

「勞症には、何か好い薬があるつて言つたね、日本橋か何處かに——」

「あ、それはお姉さまがお存じだ。姪の山田さんに、あれをそつと飲ませたら、大變に効目があ  
つたと言つていらつしやつた……。しかしあの薬は當人に知らせないやうにして飲ませるんだつ  
て……」

「何うしてだえ？」

「何でも、そんなことを言つてゐましたよ。今度實が來たら、一つ買はせて、内所で飲ませて見

なくつちや——。今、死なしちや、本當に可哀相だ。苦勞をしに生れて來たやうなものなんだか  
ら。せめては實でも、一人前になつて、田舎の人達を呼ぶ時分まで生かして置かなけりや」

「さうだとも……」

「思ふやうにはならないもんだねえ。折角、好いところへ行つて、運が向いて來たと思へば、病  
氣になんかかゝつて」

「本當だ」

「さう言へば、定さんも、いよく家に歸るつて言ふぢやないか」

「さうだつてな、俺の言つた通りだ。何うせ、長いことはない。一二年だつて、だから、俺は言  
つたんだ。この前、芝留さんに逢つたら、良太さんの言つた通りだつて言つて喜んでゐた。定さ  
んも、もう目が覺めたんだらうよ。あれから二年になるもの」

「そしてあの子は、何うするんだねえ？」

「子供は引取るんだらう。女の見は女につくんだつて言ふけれど、あの母子に押つけては可哀相

だ。それは芝留さんだつて、わからない人ぢやないから、その位のことにはするだらう」

「定さんは、矢張田舎に行つてるのかしら？」

「さうだらう？」

「この春あたりでも、よく逢ひに行つて困つたつて言ふから」

「ぢや、子供は矢張、あそこに里にやつてあるのかしら？」

「さうだらう。……」

「あの娘は？」

「矢張、吉原でおいらんをしてるんだらう。大變賣れるんだつて？」

「お職を張り通してゐるつていふ話だよ。だから、あのお袋も、今ぢや樂なんだらう。何でも下谷近所にゐるつていふ話だよ」

「難かしい話でも、何でも、時が経てば何うやら斯うやらきまつて行くもんだな」

良太はこんなことを言つて笑つた。

その次ぎの次ぎの日曜日にやつて來た時には、實は詳しく伊東博士の診察したおてつの病状を

良太やおかねに話した。一二年経つ中に、實は見違へるほど大人になつてゐた。丁度二十一歳で、世の中のことや、一家のことや、一家に對する自分の責任などがもうそろ／＼わかりかけて來てゐた。矢張、袴を短く、大きなステッキをふり振して、天氣の日に高い足駄などを穿いてゐるけれども、學問は目に立つほど進歩して、漢文でも漢詩でも出來て、今では塾頭になつて、先生の代理に彼方此方に出かけて行くことが出来るやうになつてゐた。旦那なども、「實は出来る。此間作つた漢文を見たが、立派なもんだ」など、言つて褒めた。

診察料が十圓、その高いのに誰も驚く伊東博士の診察も、おてつの病症に、はつきりした斷案を下したに過ぎなかつた。「何うしても、肺病なんですつて。もう、かなりわるくなつてゐると言ふ話でした。大丈夫だよ、心配しないでも、石に嚙りついて、まだ十年や十五年は生きてゐて見せるなんて姉さんは言つてゐるけれど、矢張淋しさうな顔をしてゐました」かう實は伯父伯母に話した。

「まア、おてつが、それは困つたね。何うしてそんなわるい病氣になつたかね」かう奥方もお姉

「さまでも言つた。あの病氣は、産後、何うかすると出るつて言ふから、矢張、いろく心配したと見えるね」

「そんな血統なんか、何處にもありやしないんですのに、何うしたことですか」良太はかう考へるやうにして言つた。

「姉さんは、國へは言はずに置けつて言ふんですけれども……何うしたら好いでせう。心配はするにはするでせうけれど、さうかつて、知らせずには置けないんだから」  
實がかう言ふと、

「さうだねえ、心配するからつて、知らせずにも置けないねえ。仕方がないから、言つてやるんだね」おかねの顔には、心痛の色が歴々と見えてゐた。

日本橋にある藥を取寄せて、それを最中の飴の中に入れて、實が持つて行つてこつそり飲ませたりした。何だか、變な顔してゐましたけれども、別に氣も付かないやうでした。その次ぎ來た時、實はかう伯母に話した。

發病したのは、その前の年の秋あたりからであつたが、その年の秋近い頃には、その容體はもうかなり重くなつてゐた。おてつは、その時三番目の子を懐妊してゐたが、生れ月の九月に生れた可愛い女の兒を、かれはもう哺育することが出来なかつた。病氣は日増にわるくなつて行つた。伯父や伯母や故郷の母や、さういふ人達の神詣りも祈禱も何の効もなかつた。實は此頃では蒼白い顔を薄暗い六疊の空氣にくつきりと際立たせて、さびしさうにして寝てゐる姉の姿を日曜日ごとに見た。

女の兒を預る爲めに、一つは娘の病氣を見舞ふために、田舎からお幾が上京したのは、秋ももう末近い頃であつた。お幾は七年振りであつたやとおかねに逢つた。私はおてつの顔を見ると、涙が出て、碌に話も出来ないんだもの。舅も小舅もゐるんだからと思つて、こらえてゐるんだけど、顔を見ると悲しくなつて……。本當に、何うしてあんな病氣に取附かれたのか。それを考へると神様も佛様もないやうな氣がしますよ。あの子位小さい時から苦勞して、私を思つて呉れたものはないのだからね、おかねさん。それや、ね、石川も心配して呉れて、高いお醫者にもか

けて呉れたり、看病には何不足もないけれど、それでも、十日でも好いから、出来るなら田舎に伴れて行つて、ゆつくり保養させたいと思ふよ。何と言つたつて、病氣の時には、肉身でなくちや、ねえ、おかねさん」

かうお幾はおかねに話した。

「でも、まア、田舎ではかゝりたくつてもかゝれないやうな醫者に見て貰つてゐるんだから、三日おき位には、診察料を五圓とか取られるんださうですよ」

「それは、ねえ、もう、石川はよくして呉れるのはわかつてゐるけど」

かう言つてお幾は涙の眼を拭つた。

「でも、まア、折角、來たんだから、實にでも一日案内させて、東京を見てお出だなさいよ、嫂さん。東京もあの時分とは、餘程變つたから」

慰めるつもりで、かうおかねが言つても、お幾は、「見物どころぢやない」かう言つて、一日でも多く牛込の病人の側になるやうとした。

お幾は自分等の田舎の貧しい居食の生活に引くらべて、良太夫婦の生活の次第に餘裕が出て來てゐるのを見た。姪のお初なども見違へるほど大きくなつて、不斷着る着物なども綺麗なものを着てゐた。大きな立派な長火鉢なども買はれてあつた。娘のお勝が東京から歸つて來た時、「新町のをぢさんやをばさんは、銀行の株券を澤山持つてゐるつて言ふ話ですよ」などと言つたことが思ひ出された。お幾は、一夜とまつて、田舎の士族の益々零落して行く話などを盡きずに良太夫婦にした。

話の中には、實の話だの、眞弓が世話になつた話だのが出た。それでも、田舎に置いたら、此頃は、大分よくなりましたよ。勉強もしますし、成績もまア好い方です。あの時、東京から歸つて來た時には、まアこのすれつからし、一年の中に、かうも人間がわるくなるかと思つて喫驚しましたよ。あの時は、本當にあきれちやつた……。實や私に喰つてかゝるんですからね。東京といふところは、怖いところだと思ひましたね」

「矢張、他が他だから……何うしても染まるんですよ、子供は……。子供を育てるには、矢張田

「舎の方が好い」

詮造の話が出た時には、「あれも困りもんさ。何うせ碌なものにはなれないと言ふんだけど、をぢさんはまた構ひつけないんですからね。何でも放つて置け、放つて置けつて言ふんですからね。もう構ひつけないですよ。さア、何處を何うしてますかね。何でも、御所の別當をよし、それから、船に乗るんだとか何とか言つて、今ぢや、其方の方へ行つてゐるんでせうよ。利根川の通運丸にでも乗つてやしませんか」

「でも、それでも、さうして、自分で、ちやんと路を拵へて行くから感心ですね。今に、よくありませんよ。さういふ子に限つて、屹度出世しますよ」

「何んなもんだか」

おかねは笑つて、「仕方がないから、内ぢや年頃になつたら、お初に養子でも取るんでさ。詮造なんか、もう宛てにはしてゐないですよ」

こんな話が長く續いた。で、あくる日はお幾はまた牛込に行つたが、一三日経つて、名残は惜

しいけれど、さういつまでも滞在してゐる譯には行かないので、生れた赤兒をつれて、お幾は娘に別れて、田舎の方へと歸つて行つた。

おてつの病氣は、寒くなるにつれて、段々わるくなつて行つてゐた。もうどつと寝てゐるやうなことが多かつた。良太もおかねも、その間に、一二度見舞に行つて見たが、到底助かる見込みがないのは、誰の眼にもそれと知れた。實は行く度に「お前はしつかりしてお呉れよ。お前がしつかりして呉れないと、家はさ、いふさだよ。私なんか、いつ死んだつて、女だから、構はないけれど、お前は男だし、家の心棒になる人だから、うはの空でゐて呉れては困るよ、覺えてゐてお呉れ」かう言つては戒められた。病氣が重く、内では看護の手が足りないで、その年の暮に、和泉橋の大學附屬病院につれられて行つた時には、良太は頼まれて、實と一緒に、病院まで送つて行つた。

その病室は丁度二階の南の一隅で、ガラス窓を明けると、下に賑やかな通が見下ろされた。一間借り切りの一等室で、白い寢臺の傍の小さな卓の上には、赤い白い西洋の草花などが置かれて



あつた。午後からは、夕日がまともに室の中にさし込んで来た。

「實、その日蔽ひを引張つてお呉れな。あまり明るすぎる」

こんなことをおてつは言つた。髪の高い實と、四十二三になる良太とが其處に侍してゐると、其頃はまだめづらしかつた看護婦が、白い衣服を裾長に着て、病人の傍に来て、種々と世話をしに行つた。良太の眼には、時の間に外國化して行つた世の中の風俗が不思議に思はれた。何も彼も變つて行く。家の構造から日常の言葉まで。もう何處にも鬻を結つたり上下を着けたりした人は見たくも見られなかつた。何から何まで西洋一點張で、日本の女で外國人の眞似をして、裾長い洋服を着て町の通りを歩いて行くものなどもあつた。通には、二階三階の高い煉瓦造の色硝子の窓の日に照る家屋なども出来た。

良太は病院から歸つて来ておかねに言つた。「大したもんだな。成ほどあれぢや一日二兩の三兩のつてかかるのも無理はない。何から何までちやんと揃つてゐて、白い服を着た看護婦が皆な世話をして行くんだから。丁度院長が来て診察して行つたが、大變な弟子達だよ。五人も六人も一

緒にやつて来て一々診て行くんだから」

「石川さん、来てたかえ？」

「役所が遅くなつたつて、夕方来た。それから、俺は代つて歸つて来たけれど」

「おてつは何うしてたえ？」

「矢張、氣難しくなつて、實が困つてゐたよ。石川さんが、今日から病院に入つたんだから、何も氣にすることは無い。唯、病氣さへ治して呉れりや好いんだからつて言ふと、病院なんかイヤだつて言ふのに、無理につれて来るんだから、何うせ、私なんか、質のわるい病氣なんだから：。なんておてつは石川さんを困らせてゐたよ。矢張、病氣だ。焦々してゐるんだらう」

「石川さんだつて、手もないにはないが、病氣が病氣だから傳染つたり何かして困ると思つたんだらうからね」

「さうばかりでもなからうよ。實際、あゝ重くなつちや、家ではとても病院にゐるやうに十分な世話は出来ないからな」

「何うかして治らないもんかね。あれで死なれては、子供も可哀相だ」

おかねはかう言つて、深く物を考へるやうな顔をした。

病人は病院生活に次第に飽きて、やれ子供が見たいの、やれ實の來やうが遅いの、石川は何うしたのと喧しく言つて仕方がないといふ話などもやがて聞えて來た。死んでも好いから田舎の母親の許に二三日やつて下さいなどと言つて、立居も自由に出來ない身をもがいて、石川を困らせたことなどもあつた。此頃では左の肺も右の肺もすつかりわるくなつた。血なども澤山出た。おかねが見舞に行つた時には、咳嗽が留度もなく出て、痰壺に口を當てながら、顔を眞赤にしてゐた。話なども碌々出來なかつた。年の若い實は始末に困つて、まご／＼してゐるのをおかねは見た。

歸る時、おかねは廊下まで送つて出た實の傍に行つて、

「けどもね、お前。お前も用心しなくつてはいけないよ。お前でもまた、病氣でも受けるやうになると、それこそ大變だから」

「大丈夫ですよ、伯母さん」

「それは、大丈夫だらうけどもね、あんなに痰が出るんだから。用心しないとイケないよ。い、かえり。本當だよ」

「え」

實は軽く點頭いて見せた。

病院で死ぬのは何うしても厭だと言ふので、動かしてもよくないといふ病人を吊臺に乗せて、牛込の家に伴れて戻つたのは、二月の初め頃であつた。山の手では、二三日前に降つた雪がまだ樹陰の處々に残つて、寒い／＼風が裏の大樹の梢を鳴した。その夜は節分で、豆を入れた大樹を三寶の上に乗せて、例年の通り、奥の間毎に、福は内、鬼は外と良太がやつてゐる時、突然、牛込から使がやつて來て、病人の危篤を報じた。

良太は取るものも取敢へず出懸けた。つゞいておかねも行つた。

しかし、おかねが行つた時には、病人はもう死屍となつて床の上に横つてゐた。良太が行つた

時には、それでもまだ眼を明いて、良太の顔を見て、何か言ひたいやうに口を動かしてゐたが、それから呼吸を引取るのにもう間はなかつた。死人の周囲には、石川だの實だの老いた舅だの小舅だのが皆な集つてゐた。石川に抱かれた男の兒は、一度寝たのを起されて、大きな眼を明いて、不思議さうにして、大勢集つた人々の顔を見てゐた。總領の娘は、實の側に坐つて、「母さん、何うしたの？ 死んぢやつたの？」などと言つて訊いた。

病人は最後まで確かりしてゐた。一番先に舅に禮を言ひ、次に石川に子供のことを頼み、實にやさしい悲しい訓戒を與へた。小舅に向つては、「おせつさん、それでは、丈夫でいらつしやい」などと言つた。「本當に、しつかりしてました」かう言つた石川の眼には、涙が見えた。石川は夜の遅くまでかゝつて、田舎の母親におてつの死去を報ずる長い長い手紙を書いた。

野邊送りの日は、晴れた好い日であつた。石川の同僚や友人が多いので、會葬者は家の内外に溢れた。生花、銘旗、晒布にまかれた大きな墓標には、石川——妻てつ子、享年二十五歳と記された。幼ない男の兒が實と一緒に俵に乗つて、香爐を持つてついて行つたさまは、道行く人の眼

を惹いた。

その頃流行り出した神道で葬儀を行つたので、おてつは久志岐命といふ諡號を得た。桃の花の咲く時分には、田舎の神棚にも、良太の神棚にも、その諡號を書いた紙が張られて、赤飯などが供へられた。お幾からおかねに寄した手紙には、泣いても泣いても盡きない涙が字句の間に薄くにじみ出してゐた。

十八

一年二年はまた經つて行つた。その時分には前の通に面して、長屋が何軒も出來たので、「良太、お前も長屋に入つたら何うだ」かう旦那や奥方から言はれて、良太は、その門前の左の角のところにある一軒に移つて住んだ。三疊に六疊に四疊半、狭い小さい家だけれど、それでも奥の二階に住んでゐるよりも、自分の家ときまつただけに居心地が好かつた。良太はいつも其處から朝早

く草鞋がけて出かけて行つた。おかねも奥から呼びに来ると、何をやめても出かけて行つた。

お初はもう十七になつて、學校も去年で卒業して、其頃は近所の裁縫の師匠の許に通つて行つてゐた。常磐津の娘に糸口をあけて貰つた三味線も、根が好きなので、その後もやめずに近所に通つて、此頃では乗合位は立派に弾けるやうになつてゐた。長火鉢の置いてある六疊の一間の長押しには、其時分の参議連の肖像の銅版畫が麗々しく額縁に入れられてかけてあつて、その傍の柱に、鬱金の袋に包んだ三味線が下けてあつた。何うかすると、お初は、結び立の島田髷の鬘をふつくらと見せて、唐縮緬の派手な襟の下から白い美しい肌やら襟やらをのぞかせながら、獨り靜かに三味線を弾いたりなどした。其處に、表の格子が音高く明いて、實が不意にやつて來たりした。

「誰？ 實さん。誰かと思つた……」こんなことを言ひながら、お初は猶三味線を弾きつゞけた。

「伯母さんは？」

「奥」

「さつき行つたの」

「もう、歸つて來る時分ですよ」

平氣で一段續けて弾いてから、お初は三味線を袋に入れて、柱にかけて、それから、火鉢の傍に來て、鐵瓶の下の火をあらけた。

「今日は、休暇？」

「休みぢやないけども、麻布まで代稽古に來たから」

「麻布から廻つたの？ 遠いでせう」

「なアに……」

「本郷から來るより、それでも近いかしら？」

「同じ位ですよ」

お初はお茶を淹れて、けんどんの中をさがして、近所で買つた菓子などを出した。お初は眼の細い、色の白い、やさしい、素直な娘であつた。芝居が好きで、近所の上さんと一緒によく猿若

時は過ぎ行く

一五八

町になど行つた。

「今度の狂言は、何う？ 知りませんか」

「よく知らないけど、此間、新聞にかいてあつた。今度は、餘り面白くないやうです」

「さう？ 木挽町は？」

「木挽町も好いけど……、新富の方が今度は好いでせう？」

「さう」

かう言つたが、實の顔を見て、「今度、又奥さまと一緒に伴れて行つて戴かう」  
其處に、裏の木戸の開く音がして、おかねは歸つて來た。

「實が來てるのかえ？」

「今、來たばかりですよ」

「おかねは上つて來て、」

「牛込ぢや變りやないかえ」

「此の前の日曜に行つたぎりだけでも……」

「新しい嫂さんに、子供がないつて好い鹽梅だね」

「え」

「でも、お前など行つても、よくして呉れるかえ。今度の家には、まだ行つて見ないけれど、深川だつて言ふぢやないかえ。何處だえ、殿様のお下邸のある近所かえ？」

「高橋のぢき近所です」

「それでも、石川さんは段々立身して行つて好い鹽梅だね。暑長さんだつてね」

「え」

「ぢや、官舎だね」

「え……」

「新しい嫂さんの親類の書生さんが來るつてね」

「嫂さんの甥でせう。醫者を勉強してゐる人です」

時は過ぎ行く

一五七

「さうかえ？」かう言つたが、「お幸だけは惜しいことをしたね。もう少し田舎で預つてゐれば好かつた。それやね、嫂さんがわるいんぢやないんだらうけども……、もう少し早く氣がついて、醫師にでもかければねえ。死んだおてつの記念のやうな子だつたし、田舎でも、骨を折つて、あれまで成長くしたんだからね」

「仕方がありませんよ」

「それは仕方がないつて言へば仕方がないさ」かう言つて、おかねは言葉をとめて、「姉さんを生かして置きたかつた！」

實は黙つてゐた。

「田舎から便があるかえ」

「此間ありました。眞弓が大きくなつて、漢詩なんか作るんですつて、東京に早く出たい、出たいと言つてゐるんですつて」

「お祖父さん、お祖母さんも丈夫？」

「別に、變りはないやうです」

「早く東京に呼ぶやうにしくつちやね、お前」

「え」

何うかすると、實は此ま、勉強を止して了はないで、大學へでも入りたいやうな語氣を見せた。「何うも漢學ばかりでは、今の世の中は駄目ですよ、何處へでも、英語が要るんですからね。英語でなくつちや、役に立たないですよ」

「だつて、お前、さういつまでも勉強してゐられやしないよ。それやね、あり餘つて、學費がつづけられて、家がしつかりしてゐれば、勉強するに越したことはないけれど、さうも言つてゐられないお前の體だからね」

「私も、漢學なぞやらないで、士官學校へでも入れやよかつた」

「あんなことを言つてる」

「でも、水澤の政、あれなんかも入つたし、それから小林も入つた！」

「でも、父さんのことがあるから、軍人にしたくないつて、母さんが言つて、それでよしたんだもの」

さう言はれると、實はいつも黙つて了つた。

「まア、そんなに言はないで、勤めに出たつて、勉強は心がけ次第で、いくらも出来るんだから——。まア、兎に角一度は早く親達を呼んで安心させるやうにしなければりや——。奥でも、旦那がそんなことを言つてたよ。實も、いつまで勉強してゐたつて仕方がないから、勤める口があつたらつとめたら何うだつて、旦那が勤めてゐる中は、何うにでも出来るやうな話し振りだつたよ」

「え……」

實は羨え切らないやうな返事をした。

實は來ると、いつでも奥に行つたり、廣い邸の中を歩いたり、近所にある十二社の瀧の方へ行つたりして一日を暮した。天正時代からあるといふ松の古樹に思ひを寄せて、長い七言古詩をつくつたりした。實には、此頃世の中のこと、生活のこと、東京のこと、段々わかつて來てゐる

た。實は韓退之の文章を聲高く讀んだりした。

夕飯には、おかねは五目飯を作つたり、旨いお汁を拵へたり、通りに行つて肴を買つて來たりして、いつも實を御馳走した。〇をばさんの處に來ると、お汁を御馳走になるのが一番樂みだ。塾のは拙いんだもの。丸で鏡汁見たいなやうなもの。こんなことを實は言つた。

時にはおかねは奥の話などをした。〇精一さんには、お嫁さんが出來て、前橋に行つて、一本立でやつてゐるから、何うしても、あとをつがせる養子をお貰ひにならなければりやならないんだが、行く行くは、あの松江のおみかさまのお次男をお貰ひになるやうなおつもりらしいが、お嬢さんが、わからずやでね。もう、今年、お前十二だらう。それなのに、學校は落第するし、勉強は嫌ひだし、奥さまが喧しく仰しやつても、ちつともわからないんだから、あれも困るのさ」などと言つた。伯父、伯母を透して見た奥の家庭の空氣なども、實にはおぼろけながら此頃飲み込めて來てゐた。お光と言ふ養女は、美しい子だが、それが、實かたづねて行くと、實さん、實さん、裏に行つて遊びませうか」などと言つた。

實の眼に映つた良太は、いつも變らないをぢさんであつた。いつ行つて見ても、草鞋を穿いて、彼方此方と邸の周圍を直したり何かしてゐた。植木屋と一緒になつて働いてゐたり、大工や左官の世話を細々と焼いてやつたりしてゐた。邸の中で顔を見合せると、「あ、實さん、来たかえ、緩くりしてお出で」などと言つた。

其頃、奥では人を多勢入れて、麥酒醸造などを始めてゐた。そのために、別に裏に一軒、家を建て、機械や道具を据ゑたりなどした。外國人の技師などがやつて来て、邸の中を歩いてゐたりした。その技師は名をカアルスロツプと呼ばれた、養女は「カアルスロツプ、カアルスロツプ」などと言つて、その跡をついて行つた。姉刀自の肥つた姿も、をりく醸造所のあたりに見えた。「旦那は本當にあゝいふことをするのが好きだからね。なアに、ビールなんて言つて、まだ今年出来やしないんだよ。お錢をかけて、寝かして置くやうなもんだよ、來年か、來々年にならなけりや、賣り出すわけになんか行かないんだよ。何でも、旦那はめづらしいことだと云ふと、すぐ乗つて了ふんだから。それで、つい損をするんだよ。お茶の時だつて、葉で賣れば好いものを大

きな構へにして、お終には矢張損なんだから、よせば好いのさ」その話が出ると、おかねはいつもかう言つた。

「でも、まア、奥なんか、少し位損をしたつて、お金があるんだから」

こんなことをも言つた。

奥に訪ねて来る零落した親類達の話をおかねはよくした。中には、旦那を欺いて、ある人のために、三重抵當の金を借り出してやつたりするものもあつた。旦那の方の親類にも、奥方の方の親類にも、榮えてゐるやうな人は一人もなかつた。田舎で石屋を始めた元の國家老の家の主人は、暫しの間にすつかり損をして、田舎にもゐられなくなつて、東京へ出て来たが、書畫の方にいくらか眼が明いてゐるので、その方に手を出して、贋の繪などを拵へて、辛うじて生活をつゞけてゐた。

それに、奥方の末の弟が、四十五六で、襦袢を下けては、よくやつて来た。昔は江戸家老の坊ちやまで、上下や袴をつけたその姿は何處の貴族かと思はれるほどであつた。御家流の字が上手



で、歌が上手で、武藝では弓が藩でも指に折られるほど上手であつた。矢貝様の義綱さまと言へば、諸家の藩中の娘達は知らないものはない位であつた。それに、今では、不都合なことがあつて、奥でも出入をさし留めてゐるので、姉に逢はうとしても、ぢかに訪ねて行くことは出来なかつた。

かれは昔縁故のある人達といふ人達をさがしては、あはれつばい手紙を書いて、そして金を無心した。その金ももう大きな額ではなかつた。一圓借せ、二圓借せ、自分の下に使つた仲間の家には、五十錢借せと言つてやつて、それを借り倒したといふので評判であつた。

「義綱にも本當に困る」

奥方はその話が出ると、いつも穴にでも入りたいやうな顔をして言つた。

その弟が時々おかねの家の裏の木戸をそつと明けて訪ねて來た。

「おかねゐるのかえ？」

かう言つて入つて來て、

「氣の毒だけれど、また、一本、手紙を姉の許へ持つて行つて呉れないか。この寒空に着物がなかつて困る」

こんなことを言つて、硯と巻紙とを借りて、すらくと御家流の巧い字で手紙を書いて、それを封じてお姉さま、義綱よりとして、それをおかねに渡した。

さういふ時には、奥方は旦那に内所で、いつも三圓、五圓と渡して寄した。

「何うもな、かうなつちや、人間もおしまひだ」

こんなことを言ひながら、義綱は暢氣に笑つて見せた。

「でも、政行さんは——」

「あれは、もう何うしたか、何處に行つたかわからない。死んだかも知れないよ」

「おかつさまは——」

「あれも、な、親不孝でな。私が行つたつて、親が來たとも思つてやしない。それに、子供にしても、さう度を無心を言はれては困るからな」

困つてゐながら、さう困つた風にもおかねには見えなかつた。

「どうも世の中が移り變る。見て、も、目まぐるしいやうだな。昔のことなんか、丸で夢のやうだ。瓦斯だなんて言ふものが出来て、夜も明るくなつたな。何でも、昔ものは駄目だ。世に後れて了つてな、何一つ、仕ようと思つたつて、出来るものがないんだから。まアまア字が書けるからと思つて、此間中、手習の招牌をかけて見たが、お家流なぞ習ふやうなものはないわな。……さうかと言つて、車も引けないしな」

かう言つて、何か欲しいものがあるやうにあたりを見廻して、「おかね、お前のところには、煙草があるな。一服御馳走して呉れな、煙草も買つて吸ふ錢がない」

「さあ、さあ、何うか」

おかねが出すのを、旨さうにして吸つて、「これも昔の情人だ」など、言つて、のんきさうに鼻から煙を出して見せた。

そんな處に、何うかして、お初が歸つて來たりすると、「お初坊、こんなに大きくなつたか。

見違へるやうだ。好い娘になつた。あとからすん／＼皆な大きくなつて來るんだから」

見兼ねて、シャツの古いなどを、おかねがやると、「これは難有い。何うして、これでも買へやしない」さういふ言葉を聞くと、昔を知つてゐるおかねは、同情せずには居られないやうな氣がした。

「良太へも、久しく逢はんが、よろしく言つて呉りやれ」

かう言つて義顯は出て行つた。

### 十九

その年の暮近く、實は旦那の世話で、その同じ役所に勤める身になつた。月給は十五圓、今は少ないがその中には段々上るやうにするからといふことであつた。實は長年世話になつた先生の本郷の塾から、本箱やら机やら行李やらを俵に載せて、取敢へず良太の家へと移つて來た。本郷

の先生は錢別に唐本の文集などを呉れた。

「ひとり下宿なんかしたつて仕方がない。それよりも、家にゐて、此處から勤めに通ふやうにする方が好い」かう良太もおかねも言つた。移轉して來た日には「まア、まア、それでも無事に勉強して、先の先生にも錢別まで貰ふやうになるのは、並大抵なことぢやなかつた。まア、今日はお前のお祝だと思つて……」など、言つて、おかねは赤飯を炊いて、神棚に灯を上げて、お膳にはお頭附などをつけた。

足を洗つて、内に上つて來た良太も、いろ／＼と机の置きどころや、寢道具のしまひ所などを心配して世話して「まア、これも實さんだから出來たんだ、並大抵でなかつたのは知れきつてゐる。さうときいたら、田舎でも、お祖父さんもお祖母さんもさぞ喜ぶだらう。唯一つ残念なのはおてつさんのないことだ。姉さんがゐたら、さぞ喜ぶたらうに……」など、言つた。神棚の灯の明るいのもおかねには嬉しかつた。

お初も家が賑かになつたのを嬉しさうにいそ／＼してゐた。

「實さん、いつからお役所に行くの？」  
など、訊いた。

その夜は、お初は三味線を下して、近頃習つてゐるものを温習つて見せたりした。芝居の話も出れば、田舎の話も出た。夜が更けるまで一家は睦しさうに話した。

「矢張、死ぬもの貧乏だ」

かう言つた良太は、實の父親の戦死などを思ひ浮べてゐた。

實の机を置いたところは、長火鉢のある茶の間の向うの四疊半の間で、そこは、猫の額のような狭い庭ではあるけれども、兎に角樹の影の多い庭に向つてゐた、丁度其の向うが廁になつてゐて、瀬戸の手水鉢の置いてある先には、赤い實のついた南天燭が叢をなして茂つてゐた。廁から出て來るお初の島田鬘や、すつきりと形の好い襟首や、派手な唐縮緬の襟や、色の白い手首などが實の坐つてゐる机の處から見えた。

實の机の上には、文集だの詩集だの、歴史の本などが一杯置かれてあつた。時には、机の白紙

の上に頭を垂れて、長い間詩や文を苦吟してゐることなどもあつた。と、其處へお初がやつて来て「お茶が淹りましたよ。此方にお出でなさいな」かう言つて、實を長火鉢の方へ伴れて行つた。實は其處に引越して来てから、一週間ほどして、やがて役所に勤める身となつた。それには書生のなりでも行かれないからと言つて、おかねは銘仙の着物だのけんちんの羽織だのを買つて来て、急いでお初と二人で夜業をしてそれを縫つた。毎日持つて行く辨當箱なども買つて来た。「實、お前は何か好きだえ？ 辨當のお菜をよくきいて置かなけりや——」  
「何でも好う御座んすよ、をばさん」  
「でも、ね、何うせ、持つて行くなら、好きなもの、方が好いから」  
「何だつて構ひやしませんよ。塾にゐた時のことを考へりや、食物なんか何だつて好いんですよ」  
「でもね……」  
こんなことを言つて、おかねは玉子をいつたり、豆を買つて来たり、肴の切身を一片通へ行つて買つて来たりした。おかねは俄に男の兒を持つたやうな氣がした。

ある夜、良太は言つた、

「さう言へば、定さん、子供が出来たつてな」

「もう……」

「だつて、もう一年から上になるよ。あの嫁さんが来てから」

「さうなるかねえ、早いもんだね……。誰がさう言つたの」

「芝留さん言つてたつて。お蔭で、まア、息子も家のものになりました。もう大丈夫です。あの時、貴方がさう言つて下さつたんで、捨てた氣になつて、却つて拾ひました。かう言つてよろこんでゐたよ。孫が出来ましたから、もう安心なもんだなんて、にこ／＼してたよ。男の兒だとさ」  
「まだ、あの子は里にやつてあるのかしら」  
「さうだと……。もう、餘程大きくなつて、可愛くなつたとさ。好い兒だとさ。引取らうつて言ふんだけど、先で手放さなくつて困るんだとさ……」  
「いくつになるだらう？」

時は過ぎ行く

一五

「もう來年は四つだ」

「早いものねえ」

毎朝、實が袴を穿いて、辨當を持つて、「行つて参ります」と、丁寧に挨拶して出かけて行つてから、一時間以上も経つて、役所に通ふ旦那の俵は家の前を通つて行つた。

夜は實は四疊半に入つて、机に向つて遅くまで勉強した。時には、ランプの油がなくなつて、ぢつと鳴つて暗くなつて行つたりした。ランプの笠には、漢詩の韻字だの、文章の熟字だのがところどころに書いてあつた。「お前、笠に字を書くと、暗くなつて仕方がないぢやないか」かうおかねが言つても言つても、矢張、實はそこに思出した好い詩の句などを書いた。

良太は明日があるのでいつも早く寝たが、おかねとお初とは、茶の間で遅くまで裁縫をした。おかねは内職の足袋の裏を其處に出して、「これでもちつとは小遣になるからね」など、言つた。茶の間で寝る時には、お初は廁に行つての歸りに、「實さん、まだ起きてるの？ もうおやすみなさいな」など、いつも聲をかけた。やがて茶の間で床を敷く氣勢が實の方へも聞えて來た。「お、

つめたい。寢衣を行火にかけて置かなくつちや堪らない」こんなことを言ふお初の聲がしたりした。

床に入つてからも、實はランプを枕元に持つて來て、本を読んだ。何うかすると、體が温つて來て、つい眠氣がさして、ランプを消さずに寝て了ふことなどもあつた。夜中におかねが廁に行つて見ると、ホヤが黒くなつて、灯がちら／＼と半消えかゝつてゐたりした。「實、お前ランプを枕元に置いて本を読むのはおよしよ。あわで、手でも延して、ひつくりかへして御覽な、それこそ大變ぢやないか」かうおかねが言つて聞かせても、實は矢張ランプを枕元に持つて行つた。それに、役所に勤めるやうになつてからの實の體の弱いのをおかねは心配した。實はよく風邪を惹いてイヤな咳嗽をせいた。「何うも體の具合が變だ」など、も言つた。「何うかしたんぢやないか、お前、お醫者さまに見てお貰ひよ」かう言つた伯母は、死んだおてつの病氣を頭に浮べてゐた。

「お前の體は、本當に大切なんだから、今、病氣にかゝられちや、それこそ修業した效もないん

時は過ぎ行く

一七

だから、大事にしなくつてはいけないよ。夜更しがわるいよ。十時になつたら、ちやんと寝るやうにおしよ」

「え」

「えぢやない、本當だよ。母さんやお祖父さんは、皆なお前を便りにしてゐるんだからね」  
「大丈夫ですよ」

實は矢張勉強することをやめなかつた。獨學でも、何でも、兎に角、自分は豪い人間にならなければならぬ。他の友達のやうに、今の世に流行する英學を學ぶことが出来ないが、その代りに、漢學では、誰にもひけを取らないすぐれた學者にならなければならぬとかれは思つた。體が大事だと年寄はよく言ふけれど、それを思つて勉強しないではゐられなかつた。かれは作つた漢文や漢詩を、日曜日には本郷の先生の許に持つて行つて見せた。

「うむ、これは好い。こゝから先が好い。こゝは圈點だ」  
かう言つて褒められるのが實には何よりも嬉しかつた。

年は應て暮れて行つた。奥の餅つきの日には、良太もおかねも例年の通り朝早くから手傳ひに行つた。實が行つて見ると、廣い臺所の真中に、大きな臼を据ゑて、良太の搗く餅のこねどりをおかねがした。竈の下には火があかく燃えて、重ねた蒸籠からは、湯氣が白く騰つてゐた。奥方が其處に出て来て、その賑やかなさまを見て、「こねどりはおかねは上手だ。あれでよくあぶなくないもんだね」など、言つた。姉刀自の姿も其處に見えた。奥では、養女のお光が琴をさらつてゐる氣勢がした。

「實。旦那さまが呼んでゐるよ」かう言はれて旦那の室に行つて、歴史の話をして歸つて來ると、丁度午で、おかねはつき立ての餅をお櫃に入れて持つて來て、「お初、これをお雑煮にして、實とお前とお上り」かう言つて臺所に置いて行つた。お初は赤い袴をして、結立の髪を綺麗に見せて、丁度世話女房でもあるかのやうに、竈の前に蹲んで鍋の火を燃した。

「實さん、お雑煮ばかりで好う御座んすか。お汁粉も拵へませうか」  
「さうねえ」

「拵へませうねえ、わけはありませんよ。小豆はもう煮てあるんだから」  
こんなことを言つてせつせと働いた。午には二人はお膳を並べて、睦しさうにして、汁粉や雑煮を食つた。

「私、三條さまへ御奉公に上るんなぞイヤなんだけれども……」

「でも、お邸だから、好いちやありませんか」

「それはさうですけれどもね、父さんも母さんも、さうする方が好いつて言ふから仕方がないけれど……」

「その代り好きな芝居は見られるでせう？」

「何うですかね……」

「しかし、さうして一年位行つて、行儀見習をして来る方が好う御座んすよ」

「でも、ね、奉公なんて、イヤなものですよ、氣がつまつて——」

「奥方つきでせう、しかし」

「え、お嬢さんの世話を主にしなくつちやならないんですつて……。旦那さまがきめていらしたから仕方がないけれど、本當は行きたくないんですよ」

「まア、皆な、さういふんだから、少しの間、行つて来る方が好う御座んすよ」かう言つたが、實は言葉をついで、「それで、すつかりきまつたんですか」

お初は點頭いて見せた。

「それで、いつ行くんです？」

「正月になると、おき行くんでせう？」

「それでも、時々宿下りは出来るんでせう？」

「それは月に一度位は」

「まア、さういふ邸に奉公するのは好う御座んすよ。あそこは好い家庭だつて評判なんだから」

お初は黙つてゐた。

年の暮から正月にかけては、一家は賑やかに暮した。注連飾、お供餅、廻禮の人達、夜はお初

が三味線を弾いたり、近所の娘達を誘つて来て歌留多を取つたりした。良太は袴をはいて、紋附の羽織を着て、駿河臺の殿様のお邸に年始に行つた。本所の方へも廻つて来たが、先の殿様の御病氣は大變におわるいつて、あつちのお邸はこつそりしてゐました。おみきさまに御目通りをして来たが、あの奥さまは、本當に御苦勞ばかりなすつて、お可哀相でした。あの殿様が太田原から御養子に入らつしやる。丁度あの時分が、藩では朝敵になるか、官軍になるかつて言ふ境で、あの殿様は、お若いのに、一方ならずお心配なすつたんですからな。そのため、あんな風に氣が違はれたんだから……。御養子に入らつて、おみきさまが本多家からお興入になつて、あの新御殿が出来た時分には、それは盛んなもんでしたかな。殿様もお美男でいらつしやるし、おみきさまもお美しくつていらつたから、それこそ好い御一對だつて誰もお見上げ申上げたんだが、本當に、お不幸なのは、おみきさまだ。今日もお目通りをして、お氣の毒になつて、涙が出た。良太は歸つて来てから、かうおかねや實に話した。

「本當だねえ、世が變つたんだから、これも仕方がないけれど——上つ方でも、矢張り、人間は思ふまゝにならぬんだね」おかねも昔を思ふやうにして染々と云つた。

やがて正月は過ぎて行つた。で、その月の末には、お初は支度を整へて、永田町のお邸の方へと奉公に行つたが、あとはひつそりとして、實の勉強するランプの灯ばかりが遅くまで四疊半を照した。

梅が白く垣根に咲く時分には、近くにある名高い郊外の梅園に大勢東京から人が訪ねて来た。瓢箪などを持って来て、日當りの好い芝生で、酒を酌んだりなどする人達もあつた。梅の多い奥の邸に、間違へて入つて来て、「や、こゝは銀世界ぢやないのか。それでも梅が澤山あるぢやないか」などと言つて、門の中から引返して行くものなどもあつた。

實の姿は奥の庭やら、銀世界やら、垣に添つたさびしい道やら、奥の十二社の方へ行く道やらに見えた。實の郊外雜詠は、段々多くなつて、その年の四月頃には、百首以上にも達して行つてゐた。別に、實は柳州の八記に模して、郊外小記といふ短かい文章を書いた。十二社の池の畔の料理店の娘は、後には、實の顔を見覚えて、「いらつしやいました」など、言つて迎へた。「母さん、



知らないの、あれは、青山さんにゐる若旦那ですよ。お初ちやんの御亭主になる方かも知れないよ」かうも言つて噂した。

緑葉の中に幟の鯉のひらくする時すぎで、やがて梅雨が近くなる頃には、田舎の人達の上京する準備の出来たといふ手紙が實の机の上に載せられてあつた。

二十

七月の初めに、田舎の人達は上京した。

其處此處と役所の歸りなどに實がさがして歩いた貸家は、市谷の奥のさびしい通の裏にあつた。元は大きな大名の下邸の一部で、留守居の家來が住んでゐたが、それが引越してからは、家は雨風に打たれたまま、借手もなくて、徒らに長い月日を経過してゐた。「しかし家は古くつても、廣い方が好い」かう言つて實は其處を借りることにした。

船から來て東京の小網町の船宿に着いた田舎の人達の一行は、やがてその最初の借家住ひの家を、さびしい島の多い田舎めいたところに發見した。おかねは其日は手傳ひに行つてゐたが、車の音がすると、何も彼も捨て、急いで迎へに出て行つた。

「まア嫂さん」

「まア、おかねさん」

かう言つて、二人は互にうれしさうに顔を見合した。

續いて、おかねは、良太に扶けられて俥から下りようとしてゐる盲目の祖母の傍に走り寄つた。

「おばアさん、おかねですよ」

「まア、まア、おかねかえ。」

老母はこれ以上に何も言ふことが出来なかつた。續いて、祖父、眞弓、克巳などがぞろ／＼と俥から下りた。

「おぢいさん、まア、丈夫で結構でしたね」

「やれ、やれ、まア、東京に着いて、嬉しかった。女子供だから、途中で若しものことがあつてはと思つて、心配したが、まアまア好かつた。良太と實とが迎へに来て呉れたんでほつとした」  
かう言つて、頭の禿けた、いくらか腰の曲つた、今年七十一になる祖父は、暑いのを扇であふぎながら、静かに井戸などのある細い通を奥の家の方へと歩いて行つた。お幾が手を取つて老母を伴れて行かうとすると、實が「母さん、おばアさんは私が負つて行くから、好う御座んすよ」と言つて、軽々と白髪を祖母を負つて先に立つた。

「まア、まア、眞弓の大きくなつたこと……。それに、これが克巳ちゃんかえ？　まだ赤坊だつたつけがねえ。こんなに大きくなつたのかえ」

眞弓は十六で、紺の緋に唐縮緬のヘコ帯などをしめてゐた。克巳は田舎染みた結城木綿の單衣を着て、めづらしさうにして、ちよこくと彼方此方を歩いてゐた。克巳は十一であつた。人々はやがて家の中に入つた。

「好い家だね。ひろいね。間数が澤山あるぢやないか。しかしこれぢや、餘程、屋賃が出るだらうね」

東京生活を石の上の生活のやうに思つてゐるお幾は一番先にこんなことを言つた。實の月給が十八圓、それに父親の恩給が年に四十六圓、それで生計が立つだらうかと絶えず心配してゐるお幾は、こんな大きな家に住み得るとは思つてゐなかつた。

「まア、奥にもあるんだね、一間。皆で幾間だえ。四間、五間あるねえ。それに皆な室が大きいよ」

「なアに、それでも、屋賃は安いんだよ」

かう實が言ふと、

「さうかい、好いところが見つかつたね。それに勝手が便利だ」お幾はあちこちを見て廻つて、荷の着くまでと思つておかねが取敢へず運んで来た火鉢の傍に行つて、改めて挨拶して「今度はまア、いろいろお世話になつて、何から御禮を申して好いかわからない。實のことも、何んなに叔父さんや伯母さんに世話になつたか知れないんだから」

「何にも行届かないで、……それでもまあ、無事で着いてよかつた。おばアさんもゐるし、何んなに困つたらうと思つてね、嫂さん」

「それでも、祖父さんが丈夫で船宿へ行つてかけ合つて呉れたり何かして呉れましたからね。それでも、船の中は心配でしたよ。おばアさんや、子供にもしものことがあつてはと思つてね」

「まあ、然し、話はゆつくりあとですることにして、それよりも暑かつたでせう。實や、水でも汲んで母さんやお祖父さんに顔でも洗はせてお上げな。……今年梅雨が足りなかつたもんだから今月になつてめつきり暑い。それにね、わるい病氣が流行るんでね」

「さうだつてね。毎日、何百人ツて死ぬんだツてね、コレラで。昔、流行つたのと同じだつてね」

「でも、なアに、食物さへ注意すれば、大丈夫だよ。わるい物を食ふからわるいんだよ」

「田舎でも、さう言つて来たんですよ。東京はコレラが流行るから、食物は減多なものは食へない。何でも、梅干とごま鹽さへ食つてゐれば大丈夫だツてね」

「さうともね」

おかねは老母の傍に行つて、「それでも、おばアさん、よかつたね。無事に着いて。一體、何年逢はないんだらう。東京に出て来た時ぎり逢はないんだから、もう十三年になるよ。いろんなことがあつたね」

「もう、考へないんだ……。かうして、お前に逢へさへすれば、それで好いんだ。實は月給取になつて東京に来て、お前の聲をき、さへすれば、それで、もう、明日が日にも死んでも好いんだから」盲目の老母は、白い顔を上に向けて、昂奮したやうなさまして、齒のない口をもごごさせて體を震はせた。

「まあ、おばアさんも、祖父さんも、これからのんきにするんだね。私も近いから、これからは度々来るし、私の家にもたまには遊びに来て、旨いものでも食つて、のんきにするんだね」

「旨いものも何にも食へたくない。……かうしてお前や良太に逢へればそれで澤山だ」  
氣が附くと、老母の頬には、涙かほろ／＼と流れてゐた。

でも、まア、實<sup>みの</sup>がしつかりしてゐて呉れたから、かうして一家揃<sup>かぞ</sup>つて話<sup>はなし</sup>が出来るといふことやら。おてつの死<sup>し</sup>んだのが唯一<sup>たひつと</sup>つ残念<sup>ざんねん</sup>だといふことやら、子供達<sup>こどもたち</sup>が大きくなつて好<sup>い</sup>いといふことやら、それからそれへとお幾<sup>いく</sup>とおかねの間<sup>あひだ</sup>には話<sup>はなし</sup>が盡<sup>つ</sup>きない。其處<sup>そこ</sup>へ蕎麥<sup>そば</sup>屋<sup>や</sup>のかつきが、山<sup>やま</sup>のやうに積<sup>つ</sup>んだ蒸籠<sup>せいろう</sup>を持つて來<sup>き</sup>て縁側<sup>えんがは</sup>のところ<sup>ところ</sup>に置<sup>お</sup>いて行<sup>い</sup>つた。

「さア、さア、腹<sup>はら</sup>が減<sup>へ</sup>つたらう。もう一時<sup>じ</sup>だ。さあ、眞弓<sup>まゆみ</sup>も克巳<sup>かつみ</sup>も此處<sup>ここ</sup>に來<sup>き</sup>て、お蕎麥<sup>そば</sup>でもお上<sup>あが</sup>り」

かういふおかねの言葉<sup>ことば</sup>につれて、めづらしがつて外<sup>そと</sup>で何<sup>なに</sup>かしてゐた子供達<sup>こどもたち</sup>も其處<sup>そこ</sup>にやつて來<sup>き</sup>た。われ勝<sup>か</sup>ちに、箸<sup>はし</sup>と汁<sup>じゆ</sup>を入れる猪口<sup>ちやく</sup>とを取<sup>と</sup>つた。

「さア、嫂<sup>はえ</sup>さん……。實<sup>みの</sup>、實<sup>みの</sup>は何<sup>なに</sup>にしてゐるんだえ？ 實<sup>みの</sup>も此處<sup>ここ</sup>に來<sup>き</sup>ておあがり」

おかねは別<sup>べつ</sup>に、祖父<sup>そふ</sup>と祖母<sup>そぼ</sup>に蒸籠<sup>せいろう</sup>を三つづ、取<sup>と</sup>つて持<sup>も</sup>つて行<sup>い</sup>つてやつた。「おばアさん、そら、此處<sup>ここ</sup>にお蕎麥<sup>そば</sup>がある。お腹<sup>はら</sup>が空<sup>す</sup>いたでせう。そら、これが猪口<sup>ちやく</sup>、これが箸<sup>はし</sup>、これが蕎麥<sup>そば</sup>だよ」

「なアに、ばアさまは、一人<sup>ひとり</sup>ぢや駄目<sup>だめ</sup>だ。一々<sup>い</sup>入れてやんなくつちや。かんがわるいばアさまだ

からな」

斯<sup>か</sup>う言<sup>い</sup>つて、祖父<sup>そふ</sup>は一々<sup>い</sup>祖母<sup>そぼ</sup>の猪口<sup>ちやく</sup>に蕎麥<sup>そば</sup>を入れてやつた。

「東京<sup>とうきやう</sup>の蕎麥<sup>そば</sup>は、汁<sup>じゆ</sup>が旨<sup>うま</sup>いから」お幾<sup>いく</sup>も縁側<sup>えんがは</sup>の處<sup>ところ</sup>に行<sup>い</sup>つて、良太<sup>りやうた</sup>やおかねに取<sup>と</sup>つてやつて、そして自分<sup>じぶん</sup>も箸<sup>はし</sup>を取<sup>と</sup>つた。

「何<sup>なに</sup>か物足<sup>ものた</sup>らないとさつきから思<sup>おも</sup>つたら、お勝<sup>かつ</sup>ちやんがゐないんだねえ」

「あれは、可哀<sup>かあい</sup>相<sup>あひ</sup>だつたけれど……他所<sup>たところ</sup>に呉<sup>く</sup>れたんだしね。仕方<sup>しかた</sup>がないから置<sup>お</sup>いて來<sup>き</sup>ましたよ。

あれも、東京<sup>とうきやう</sup>につれて來<sup>き</sup>てから嫁<sup>かよ</sup>ける方<sup>はう</sup>が好<sup>よ</sup>かつたんですけれどもね。いつそ、伴<sup>つ</sup>れて來<sup>き</sup>やうかとも餘程<sup>よつほど</sup>思<sup>おも</sup>つたんですけれども……」

「だつて、子供<sup>こども</sup>があるんだらう」

「子供<sup>こども</sup>があるけれどもね。二三日<sup>ふた三日</sup>前<sup>まへ</sup>にも來<sup>き</sup>て、子供<sup>こども</sup>なんか入<sup>い</sup>らないから、一緒<sup>いっしょ</sup>に伴<sup>つ</sup>れて行<sup>い</sup>つて呉<sup>く</sup>れつて泣<sup>な</sup>くぢやないか、おかねさん」

「機屋<sup>はたや</sup>さんだね」